

I S S N 0918-9904

松阪市中村川流域の考古資料 1

研究紀要 第 16-2 号

2007(平成19)年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

この研究紀要は、「松阪市中村川流域の考古資料」と題し、松阪市中郷地区を中心とした考古資料を特集しました。

県内では、昭和末から平成初めにかけて、県営圃場整備事業が継続的に調査され、多くの遺跡の発掘調査が行われました。そのなかで現地での発掘調査に比重が偏り、調査資料の公表が後手に回っていた現実があり、重要な資料が、ほとんど活用されないままとなっていたことは否めません。

三重県埋蔵文化財センターでは、この反省をもとに、公表が充分でなかった資料を逐次公表し、広く公開していきたいと思います。

平成 19 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター
所長 吉水 康夫

例 言

- 1 本書は、県営圃場整備事業に伴い、昭和 60 年度から 63 年度に緊急発掘調査を実施した松阪市姫野森本町・姫野釜生田町に所在する釜生田遺跡・東野 B 遺跡・屋敷田遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。
- 2 本書で掲載する遺跡と調査年度、発掘調査現地担当は以下のとおりである。
 - ・釜生田遺跡（昭和 63 年度）田中 久生 江戸 健
 - ・東野 B 遺跡（昭和 62 年度）稻垣 良二 服部 芳人
 - ・屋敷田遺跡（昭和 60 年度）上村 安生
- 3 本書のもととなる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 4 本書の作成業務は、支援研究課が行った。執筆は奥 義次・上村 安生・竹田 恵治が行った。

凡 例

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図、旧姫野町都市計画図である。
- 2 地図類は、国土調査法の日本測地系による座標第 VI 系（旧国土座標）で表示している。挿図の方位は座標北で示している。なお、磁針方位は西偏 6° 40' である。
- 3 土層図の色調と土質は調査時の記録をそのまま用いた。
- 4 本書での遺構番号は、それぞれの遺跡単位で通番としている。
- 5 遺構番号の頭には、遺構の性格により、以下の略記号を付した。

S A = 堀	S B = 掘立柱建物	S D = 溝	S E = 井戸	S F = 炉跡	S H = 積穴住居
S K = 土坑・陥穴	S X = 墓・火葬穴・埋糞	S Z = 落ち込みなど	Pit = 小穴・柱穴		
- 6 本書での遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

縄文土器 = 押型文拓影(1/2)・それ以外の拓影(1/3)、石器 = 剥片石器(2/3)、礫石器(1/3)、大型の石器(1/3)
それ以外 = 1/4
- 7 本書内では、「つき」は「杯」、わんは「椀」に統一した。

目 次

I	歴史的環境	(奥 義次)	1
II	金生田遺跡	(奥 義次)	6
III	東野B遺跡	(竹田 憲治・奥 義次)	25
VI	屋敷田遺跡	(上村 安生)	47

挿図目次

第1図	遺跡分布図	2
第2図	調査区位置図	3
第3図	金生田遺跡遺構平面図①	7
第4図	金生田遺跡遺構平面図②・③	8
第5図	金生田遺跡SH1・3・SK33	9
第6図	金生田遺跡SH2・S E43	10
第7図	金生田遺跡SB5・6・7	11
第8図	金生田遺跡出土遺物①	12
第9図	金生田遺跡出土遺物②	13
第10図	金生田遺跡出土遺物③	14
第11図	金生田遺跡出土遺物④	15
第12図	金生田遺跡出土遺物⑤	16
第13図	金生田遺跡出土遺物⑥	17
第14図	金生田遺跡出土遺物⑦	18
第15図	金生田遺跡出土遺物⑧	19
第16図	金生田遺跡出土遺物⑨	20
第17図	金生田遺跡出土遺物⑩	21
第18図	金生田遺跡出土遺物⑪	22
第19図	東野B遺跡遺構平面図	26
第20図	東野B遺跡SH1・2・10・16・13～15	27
第21図	東野B遺跡SH11・12・17、 SF6・SK3・4・SX8	28
第22図	東野B遺跡SB54～59	29
第23図	東野B遺跡SB60・SE39・SK37・SX53	30
第24図	東野B遺跡出土遺物①	32
第25図	東野B遺跡出土遺物②	33
第26図	東野B遺跡出土遺物③	34
第27図	東野B遺跡出土遺物④	35
第28図	東野B遺跡出土遺物⑤	36
第29図	東野B遺跡出土遺物⑥	37
第30図	東野B遺跡出土遺物⑦	38
第31図	東野B遺跡出土遺物⑧	39
第32図	東野B遺跡出土遺物⑨	40
第33図	東野B遺跡出土遺物⑩	41
第34図	東野B遺跡出土遺物⑪	42
第35図	東野B遺跡出土遺物⑫	43
第36図	東野B遺跡遺構変遷図・下層調査区	45
第37図	屋敷田遺跡調査区位置図及び 周辺地形図	48
第38図	屋敷田遺跡出土遺物	49
第39図	屋敷田遺跡遺構平面図	49
第40図	屋敷田遺跡掘立柱建物SB1、 堀SA3・4	50
第41図	屋敷田遺跡土坑SK6～8	51
第42図	屋敷田遺跡掘立柱建物SB2、 土坑SK10	52

挿表目次

第1表	中村川流域より雲出川下流域における 旧石器・縄文土器出土遺跡一覧	5
第2表	金生田遺跡遺構一覧表	24
第3表	東野B遺跡遺構一覧表	46
第4表	屋敷田遺跡遺物観察表	52

写真図版目次

図版1	金生田遺跡遠景 / 金生田遺跡遠景	53
図版2	金生田遺跡竪穴住居SH3 / 金生田遺跡竪穴住居SH1	54
図版3	金生田遺跡掘立柱建物SB5周辺 / 東野B遺跡遠景	55
図版4	東野B遺跡竪穴住居SH1・2 / 東野B遺跡竪穴住居SH11・12	56
図版5	屋敷田遺跡掘立柱建物SB2・土坑SK10 / 屋敷田遺跡土坑SK6～8・12	57

I 歴史的環境

1 旧石器・縄文時代

旧石器～縄文時代の遺跡は、第1表に示した。それによると中村川流域より雲出川下流域にかけての旧石器・縄文土器出土遺跡は63カ所を数える。特に、中村川流域における縄文遺跡分布は極めて多く、県下では柳田川中流域と並び、屈指の密集地域といえる。このことは第1図の釜生田遺跡付近の分布状況にも端的に示されており、川沿いに連続と並立する様相がうかがえる。次に各時期の動向を概観してみたい。なお、嬉野宮野町より上流域の狭隘な山間部については、今のところ、矢下（大垣内）遺跡で断片的に確認されているだけである。

旧石器時代 雲出川流域を含めて中勢地域でナイフ形石器が最もまとまって確認されているのが、高茶屋台地南東端部に立地する四ツ野B遺跡である。ここでは小型ナイフ形石器20余点など好資料が採集されている。他には天保E(1)・中尾垣内(2)の両遺跡が台地端部に、中村川を挟んで向き合う位置にある。いずれもナイフ形石器各1点の確認にとどまっており、後述する尖頭器と同様、遊動生活の一端が垣間見える。

旧石器時代末期では昭和4年、鈴木敏雄氏により、久居市街南部台地上の東出遺跡で小石核が採集されている。焼野古墳(3)の調査でも細石刃核1点が認められているが、詳細は不明である。

縄文草創期 尖頭器（有茎・木葉形）特有の遊離資料が8遺跡で認められる。このうち、注目されるのは雲出川左岸・低位段丘上の木造赤坂遺跡で、身のやや長い有茎尖頭器と片面調整の柳葉形尖頭器が同一地点・同一層位から出土している。また同川右岸の西肥留遺跡(2次)では草創期ごろに特有の典型的な先刃搔器（信州系？黒曜石製）1点が出土している。雲出川の運搬した沖積砂層中の検出で、原位置とは考えがたいものの、不思議と摩滅痕は認められない。明らかに搬入による同石材の先刃搔器は県下初見である。田村西瀬古・上ノ庄北出遺跡の有茎尖頭器と共に沖積低地にかけての地形発達史と人間活動の関連が注目される。

縄文早期 前半は押型文土器群（大鼻～高山寺式）の時期をさす。初期の大鼻・大川式は希薄で断片的にしか認められていない。神宮寺式の段階に至り、高茶屋台地南線の向山・新家遺跡に示されるように、下流域へも遺跡分布が拡大する。当期の代表例は井ノ広（4）・釜生田（A）・馬ノ瀬遺跡などで、特に井ノ広遺跡では豊穴住居・推定11棟、屋外炉1基、馬ノ瀬遺跡では陥し穴6基が見つかっている。押型文土器群後半期の黄島式は釜生田遺跡、高山寺式は小谷赤坂遺跡で好資料が確認されている。とりわけ前者には戸田系沈線文と併施文の土器があり、広域編年をたどる上で興味深い。

早期後半は条痕文系土器群の時期にあたる。該当する資料は極めて乏しく、小谷赤坂遺跡（6次）の柏畑～上ノ山式類似の資料は微量ながら見逃せない。

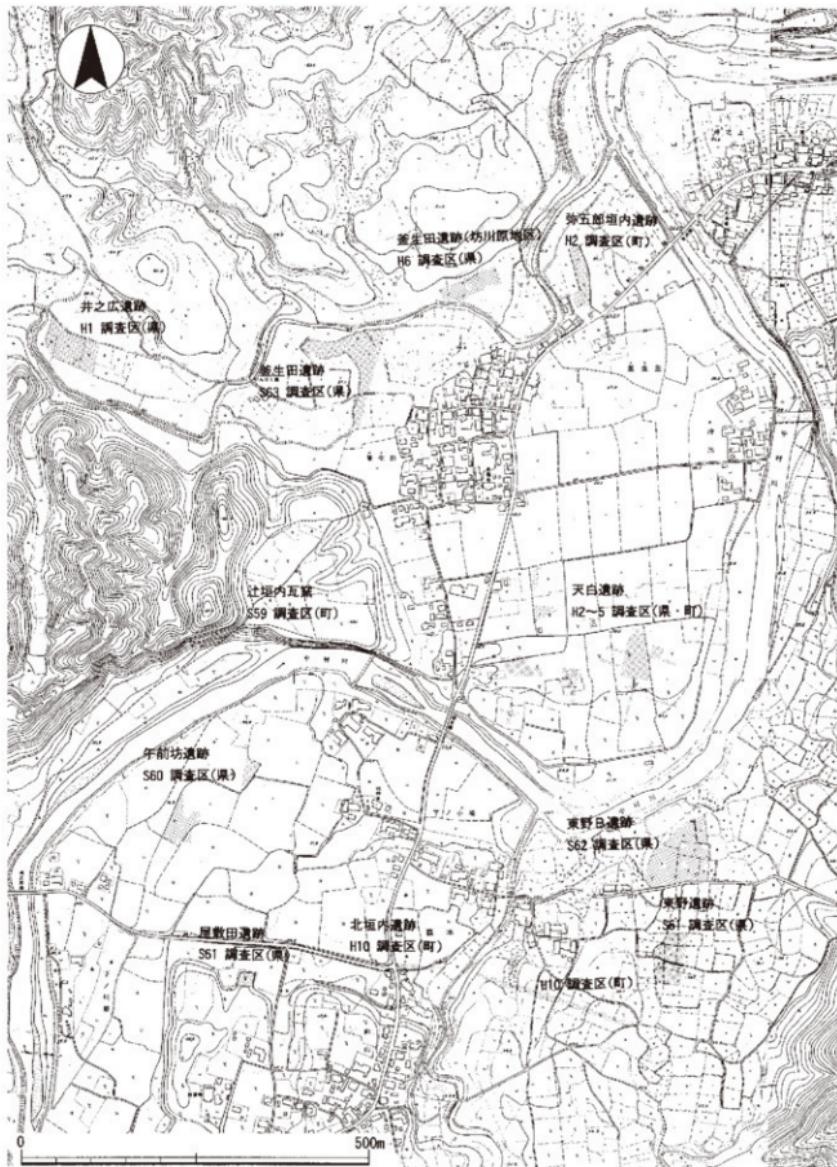
縄文前期 前半は初頭から北白川下層IIa式までをさす。この時期は早期後半の傾向と基本的に変わらず、片野遺跡で塙屋式、釜生田・下沖遺跡（5）で上広範式など東海系土器が散見される程度である。

後半は北白川下層IIb式～大歳山式ごろまでをさす。この時期（特に、北白川下層IIb～IIc期）には県下の一般的動向と同様、井之上遺跡（6）のような拠点的な遺跡が登場する。これ以外は断片的出土の遺跡が多い。末葉ごろでは新々田遺跡で東日本系・十三坊台式の深鉢1個体がほぼ完全な形で、まさにダイレクトに搬入されたような状態で出土している。

縄文中期 前半は概ね船元III式以前をさす。この時期はまとまった資料こそ見られないが、西日本の船元系の土器と東海系の北裏C・山田平・北屋敷式土器が再々共存するケースが多い。このうち、雲出下流右岸の赤部遺跡例などは著しく摩滅を受け、二次堆積によるものと思われるが、縄文海進頂点以降の活動の軌跡をたどる資料として注目される。また、針箱遺跡（7）は中葉ごろの里木II式を中心とした資料が県内では最も充実している。後半になると、遺跡数がかなり増加し、中流域はもとよりのこと、海岸線近くまで拡大する。これは縄文海進以後の冲



第1図 遺跡分布図（1：25,000）（国土地理院地形図「大仰」より）



第2図 調査区位置図（1:7,000）（旧嬉野町「都市計画平面図」より）

積地拡大や砂堆列形成に伴って活動領域そのものが拡大したことを示す。まとまった資料としては堀之内C遺跡（8）をはじめ、釜生田・東野B遺跡（B）などがあげられる。堀之内C遺跡は沖積地に埋没した微高地下位の文化層を調査した県下でも数少ない事例であろう。中期後半の遺跡数増加傾向は後期初頭にも引き続く。

繩文後期 前半は中津～北白川上層式以前とした。好資料の目立つ遺跡は弥五郎垣内（9）・焼野（10）などで、遺跡数の多い割りには限られている。後期後半になると、遺跡数は激減し、反対に下沖・天白（11）のような地域や集団の核となる拠点的遺跡が出現する。このような傾向は、宮川・櫛田川流域など伊勢南部にも共通する。天白遺跡の大規模な配石遺構群は目を見張るものであるが、明確な住居址を伴わなかっただけに葬祭空間としての解釈や意味づけについては様々な議論がある。豊富な遺物が物語る情報量も極めて多い。中でも県下最多数の土偶、朱の生産・利用に伴う関連資料、東日本系の多様な異系統土器群など、いずれも列島規模での広域的なネットワークを背景とした検討が必要である。

繩文晚期 突帯文土器の登場する滋賀里IVまたは西之山式をもって後半と前半を分ける。前半は後期後半からの消長により存続の場合と新規に登場する場合がある。前者の好例が下沖遺跡であり、後者に当たるのが釜生田遺跡である。天白遺跡は晚期に入るとき激に影が薄くなる。前半の遺跡は県下全体を見渡しても数少なく、下沖遺跡は滋賀里II式を中心として有数の資料を誇る。釜生田遺跡も竪穴住居SH1出土遺物は一括性の高い資料として貴重である。

晚期後半は最も遺跡数が増加する。それも中・下流域を問わず全域に及び、特に海岸線に近い低地部へ進出する様相が顕著である。この傾向は終末期の馬見塚式期に著しく、まさに爆発的に普及する。遺構面では土器棺墓を伴う形で展開するケースが支配的で、この趨勢は蛇龜橋（12）・天保Eに始まり、四ツ野B・雲出島貢遺跡などの馬見塚式段階に至ると、伊勢湾西岸域で広く同様の傾向がみとめられる。当地域のこの頃の土器を観察していると、焼成が技術的に卓越したものが見られ、先進性ともいえる要素が窺える。新たな水田農耕文化も、これと連

動するかのように県下に先駆けて受容するのが、当地域である。

2 弥生時代

弥生時代以降は、やや範囲を絞り、中村川流域の遺跡を概観する。

前期 筋造遺跡では前期の畑と水田跡、住居跡が確認されており、当時の農業經營を具体的に示す例として注目されている。このほか前期の遺跡は上野垣内遺跡（13）など嬉野島田町から下流でしか確認できていない。しかし雲出川上流域の下之川富田遺跡（津市美杉町）でも前期の土器が確認されており、山間の道を使用した弥生文化の伝播も考える必要がある。

中期 下之庄東方遺跡（14）では、中期から後期にかけての40基以上の方方形周溝群が確認されている。このほか、馬ノ瀬遺跡では中期後半、午前坊遺跡（D）では中期中葉の竪穴住居が、天白遺跡では中期～後期の方方形周溝墓が確認されている。

後期 下之庄東方遺跡では引き続き方形周溝群が造営されるが、大規模で鉄斧や銅劍をともなうものが現れる。片部・貝蔵遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期に至る井堰や人工路が確認されている。また天花寺丘陵では、環濠に囲まれた竪穴住居群が確認されている。

3 古墳時代

中村川流域は、前方後方墳が集中する地域である。これらの古墳は各世代の有力者の墓であると考えられている。その後の古墳は、天花寺丘陵を中心に造営される。小谷13号墳からはほぼ完形の短甲が出土している。さらにになると、本書で取り扱う中郷地区の丘陵上に横穴式石室をもつ群集墳が造られる。

4 奈良・平安時代

中村川流域は、古代寺院が集中する地域である。寺院のほかにも、精製の土師器が濃密に分布する地域としてもたらえられている。このほか中郷地区には、辻垣内瓦窯（15）や上尾戸窯跡（16）などの窯跡がある。天白遺跡などでも、当該時期の竪穴住居が確認されている。

5 中世

中世の集落跡も多く確認されている。特に中世後期には中村川流域は南伊勢の大名北畠氏の重要地域

であり、森本城（17）・釜生田城（18）・滝之川城（19）・八田城（20）・天花寺城などが築造され、屋敷田遺跡（C）は森本城の一部である可能性もある。天白

遺跡や東野遺跡（21）では中世前期の大溝や中世後期の集落が確認されている。（奥）

番号	遺跡名	旧石器	草創期	早期		前期		中期		後期		晩期		時期不明
				前半	後半									
1	矢下（大垣内）遺跡													△
2	宮野佐遺跡													△
3	下沖遺跡			△		△				○	○			△
4	大垣内遺跡													△
5	午前坊遺跡			△						△				△
6	北畠外遺跡								△	○		?		
7	川原田遺跡													△
8	東野B遺跡	木灰	○	△				○	○					
9	天白遺跡							△	△	○	△	△		
10	井ノ広遺跡			○		△		△	○					
11	釜生田遺跡	ナ?		○	△	△	△	△	○	△		○	△	△
12	釜生田（坊川原）遺跡													△
13	弥五郎坦内遺跡							△	△	○				△
14	井之上遺跡						△	○	△	△				△
15	島田遺跡													△
16	上野垣内遺跡									△			○	
17	新鳴鳴遺跡			△									○	
18	焼野遺跡									○	○			△
19	燒野古墳内遺跡	細												△
20	天保A遺跡		有実							○			○	
21	天保E遺跡	ナ	有実					△					○	
22	堀之内C地区遺跡							○	○	△	○			
23	御所垣内遺跡									○				
24	牛尾垣内遺跡	ナ						△					△	
25	ヒハノ谷遺跡							△					△	
26	下ノ庄遺跡							△	△	△			△	
27	上野麻寺下層遺跡							△	△				○	
28	葉師寺下層遺跡													△
29	天花寺下層古遺跡												○	
30	下之庄東方（5地区）遺跡							△	△	△			○	
31	雄野遺跡													△
32	針箱遺跡			△		△	○○	○						
33	小川城跡下層遺跡									△				
34	六反田遺跡							△	○				△	
35	樺原前遺跡												△	
36	清水谷遺跡									△			△	
37	小谷赤坂遺跡	有実	○	△		△	△						○	
38	小谷A遺跡												△	
39	馬ノ瀬遺跡			○									△	
40	堀田遺跡												○	
41	新々田遺跡						△							
42	片部遺跡								△	△			△	
43	五反田遺跡									○				
44	貝塚遺跡												○	
45	中川遺跡			ト										
46	庵／門遺跡												△	
47	野田遺跡												△	
48	舞出北遺跡												△	
49	赤部遺跡							△	△	△			○	
50	筋遺跡							△					○	
51	田村西瀬古遺跡	有実												
52	片野遺跡						△	○	△	△	△	△	△	
53	東出遺跡	細												
54	新家遺跡					△								
55	木造赤坂遺跡	有実・木灰							△	△	△	△	△	
56	向山遺跡			△						△			△	
57	四ヶ野B遺跡	ナ	木灰										○	
58	雲出島賀遺跡									?			○	
59	西肥留遺跡	細												
60	前田町遺跡									△			△	
61	大明神遺跡									△			△	
62	中ノ庄遺跡									△			△	
63	上ノ庄北出遺跡	有実												

旧石器欄のナシはイフ形石器、細は細石核。草創期欄の木灰は木葉形尖頭器、有実は有茎尖頭器。早期欄のトトロトロ石器略記。

旧城野・三雲町域を全域を対象とした。記号の△は微量、○はや多い、○はかなり多いことを示す。

第1表 中村川流域より雲出川下流域における旧石器・縄文土器出土遺跡一覧

II 釜生田遺跡

1 調査の経過

釜生田遺跡は松阪市嬉野釜生田町字西浦・ノンバケにある。昭和63年度県営圃場整備事業(中郷地区)に伴い、保存の不可能となった遺跡北西部を対象として発掘調査が実施された。調査は、昭和63年9月19日から開始し、同年11月30日に終了した。最終的な調査面積は4,700m²(遺跡予想範囲の約三分の一に相当)であった。

2 調査区の立地

本遺跡は、第2図で分かるように釜生田集落の北西に隣接し、すぐ北方を流れる中村川支流の古田川に向かって張り出す段丘上に立地する。現況は水田及び畠地。標高は調査区内で若干の高低差はあるが、約27m前後である。

周囲の縄文遺跡には西に古田川を挟んで、井ノ広遺跡(早期前半主体)があり、やや東方の同じ段丘続きに弥五郎垣内遺跡(後期前半主体)、東南方の中村川に張り出す段丘上には国史跡の天白遺跡(後期後半主体)が立地する。

調査区の基本層位については、東壁以外は崖に面し、かつ包含層がかなり浅いものもあってか、残念ながら記録が残されていない。

3 検出した遺構

発掘調査の結果確認された遺構には、縄文時代早~晚期・中世前中期のものがあり、遺物もほぼ同じである。ここでは主要遺構の概略を述べ、それ以外は遺構一覧表をもってまとめておきたい。

a 縄文時代早~晚期の遺構

陥し穴SK33 平面がほぼ正方形を呈し、径約1.2m、深さは約1.3mをはかる。底面は平坦で小穴は確認されていない。埋土中の遺物は微量であるが、深部付近?で山形押型文土器が出土していることから、所属時期は早期と推定される。

竪穴住居SH2 大略、楕円形に近い竪穴住居と考えられるが、北西辺は確認されていない。規模は長軸が4.5m、短軸が3.5m位である。遺構検出面からの深さは10cmに満たない。北西辺に偏るが、焼土を中心に石圓いがらしき礫群が認められる。主柱

穴と推定されるピットが1~2カ所ある。埋土内では中期末頃の土器が少量出土しているので、その頃の遺構と考えられる。

竪穴住居SH3 SH2の南西4mに隣接する。規模は東西約7.3m、南北約5.5mのやや大きな楕円形を呈する竪穴住居である。遺構検出面からの深さは約10cm。主柱穴らしきピットも認められるが、判然としない。埋土内出土の土器から中期末頃の遺構と推定される。

竪穴住居SH1 短径3.5m、長径4.5mの不整円形を呈する竪穴住居である。遺構検出面からの深さは約10cm。中央部付近に焼土とそれを取り巻くように石圓いがらしきが認められた。主柱穴の一部と目されるピットもあるが明確ではない。南辺部は中世前期の溝SD10によってカットされている。埋土内出土の土器から晚期初頭ごろの竪穴住居と考えられる。

b 中世前期以降の遺構

掘立柱建物 4棟(SB5~8)を確認した。このうちSB5は12世紀末から13世紀初頭の大型掘立柱建物で、南東隅土坑SK20を伴う。SB6や7はその付属建物と思われる。

井戸SE43 石組みの内径約65cm、検出面からの深さ約1.6mと浅く、板状の分厚い岩の上に角礫を積み上げた、ほぼ円形の石組井戸である。上部の石組は崩壊したか、廃絶時に抜き取られたものと推測される。遺物は特に出土していない。

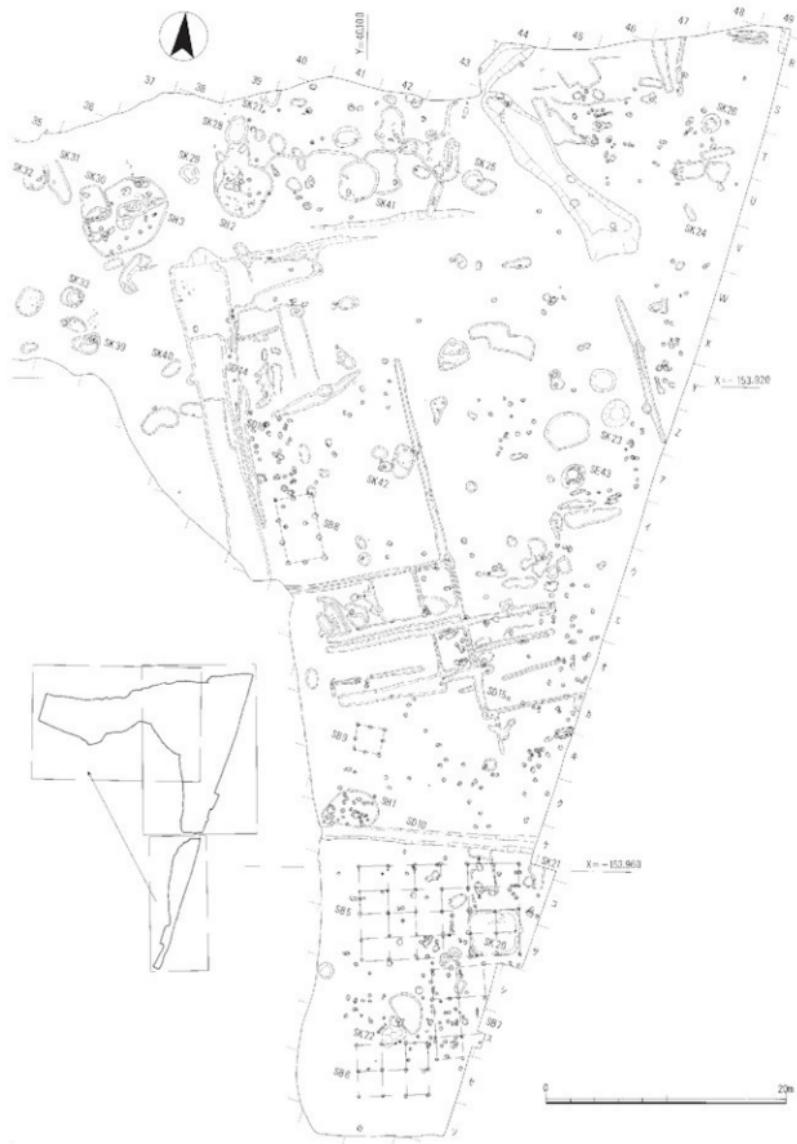
4 出土した遺物

a 縄文時代早~晚期の遺構出土遺物

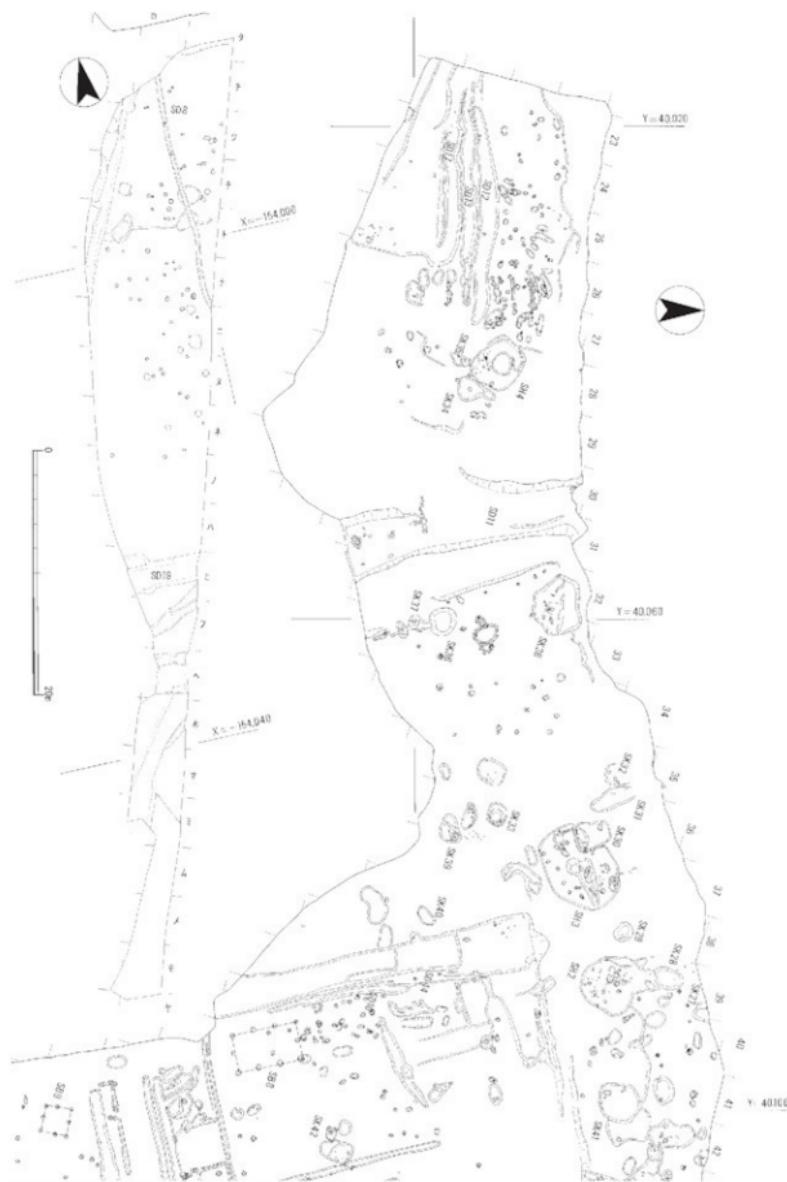
陥し穴SK33出土遺物 先端部を尖銳にした無茎石鐵(106)と土器には早期・山形押型文(107)、前期の縄文・条痕文(108・109)、中期には波状口縁下に沈線文を施したもの(110)がある。このうち、出土層位が確定なのは条痕文片(108)のIV層出土のみであるが、山形文はさらにその下位らしいことから、遺構の形成時期を早期と推測した。

竪穴住居SH2出土土器 小片が微量認められる。中期末頃と推定される(22~27)。

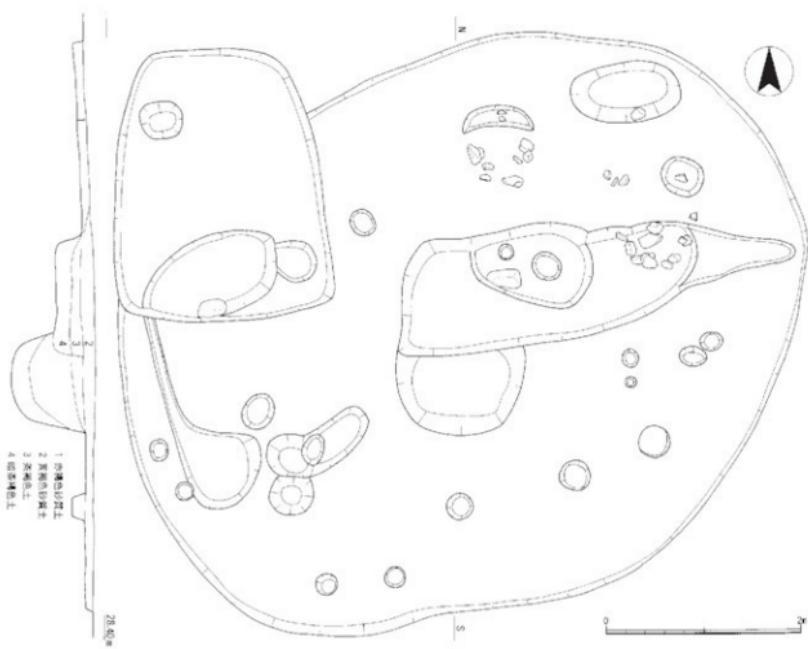
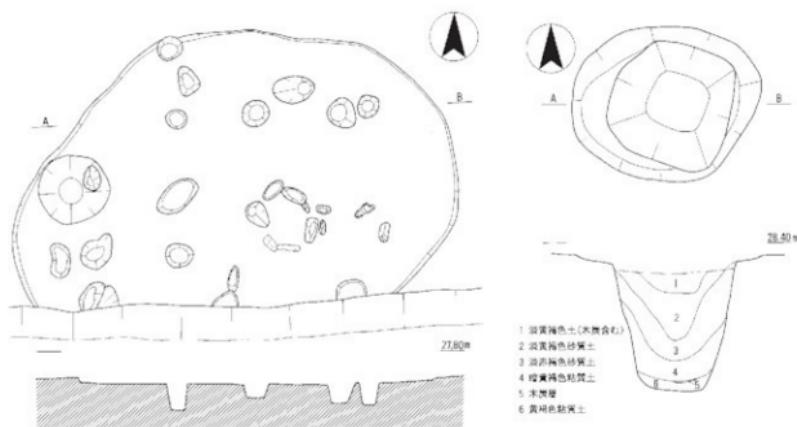
竪穴住居SH3出土土器 中期末頃の土器が比較的



第3図 釜生田遺跡遺構平面図① (1:400)



第4図 金生田遺跡遺構平面図②・③ (1:400)



第5図 釜生田遺跡SH1・3・SK33 (1:50)

まとめて検出された。28・29は中期前葉頃の破片であり、混入遺物と思われる。沈線文や刺突文主体のものと繩文を作うものがある。48・49は巻貝利用の擬似繩文である。58は口縁部で入組み状の文様構成を有する、後期初頭・中津式への系譜を考える点で興味深い資料である。

竪穴住居SH4出土遺物 59は磨製石斧であるが、素材にあまり研磨を加えていない。土器は中期末のものが微量ある(60~63)。

竪穴住居SH1出土遺物 晩期初頭頃(滋賀里II式)の組成が比較的まとまって出土した。そのころの竪穴住居か。5は粗雑な調整の長五角錐で当期の特徴を示す。4・6は未製品。すべてサヌカイト製。

土器には浅鉢の8が外面にベンガラ付着のボウル形、16は黒色磨研系のものである。9~15・17・18は深鉢で口縁部が外反し、頸胴部で稜(段)を形成する。器面調整には巻貝や二枚貝によるものとナデや磨きによるものがある。19は口縁が内傾す

る粗雑な作りの小型甌である。

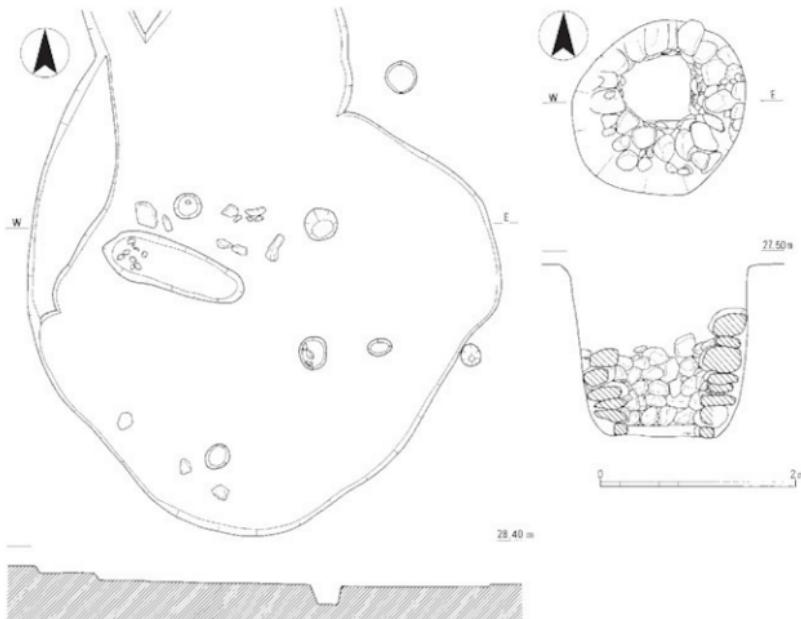
21は見方によっては獸類の土製品にもみえるが、手すぐねの單なる粘土塊かもしれない。

土坑SK25出土土器 中期末頃の土器が微量ある。土坑SK27出土遺物 石錐(68)は二等辺三角形に近い無茎のもの。両脚部がやや丸みを帯びる。チャート製。土器二点は69が早期後葉に属し、纖維を含有する。本遺跡では当該期のものとしてはこれのみしか検出されていない。もう一つの70は中期末のもの。遺構の所属時期はいずれとも決め難い。

土坑SK30出土遺物 竪穴住居SH3を切る土坑である。71の無茎石錐1点(サヌカイト製)以外は中期末の土器が比較的まとまっている(72~88)。83は橋状把手の一部である。

土坑SK31出土土器 小片ばかりであるが、いずれも中期末のもの(89~100)。

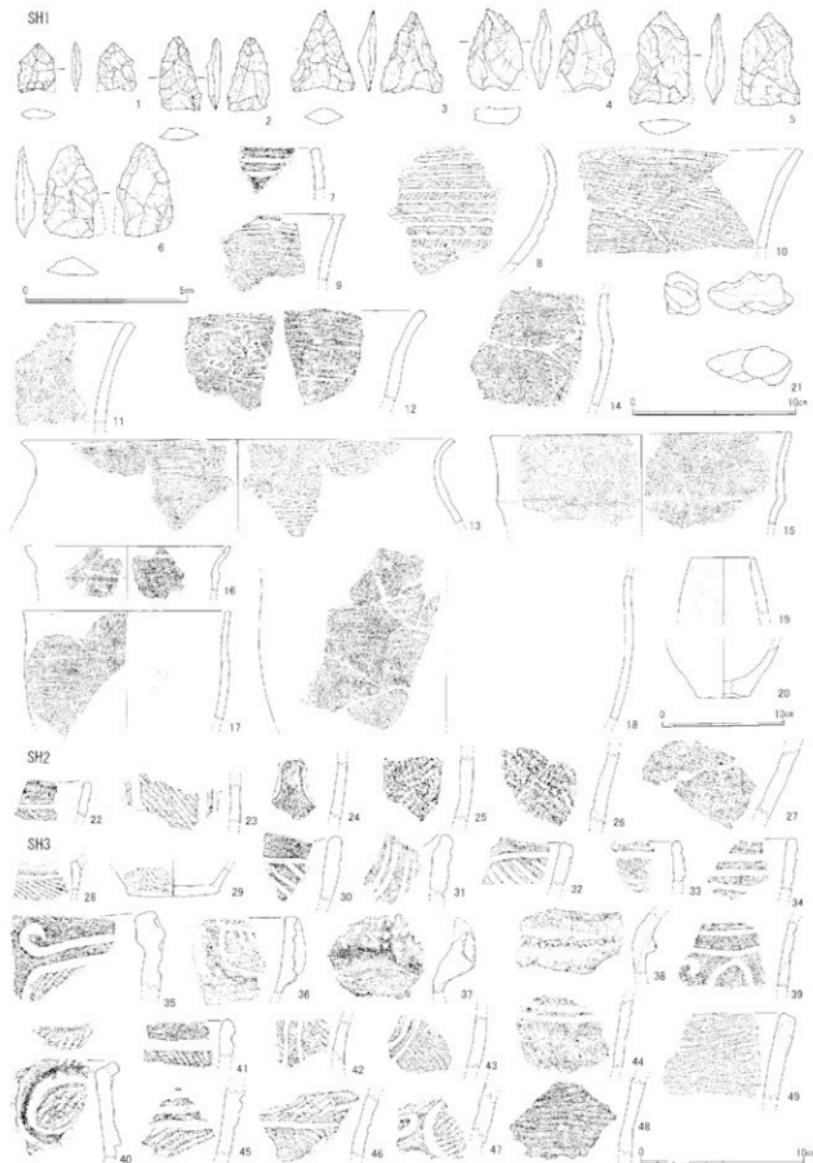
土坑SK32出土土器 中期末の土器が断片的に認められる(101~105)。



第6図 釜生田遺跡SH2・SE43(1:50)



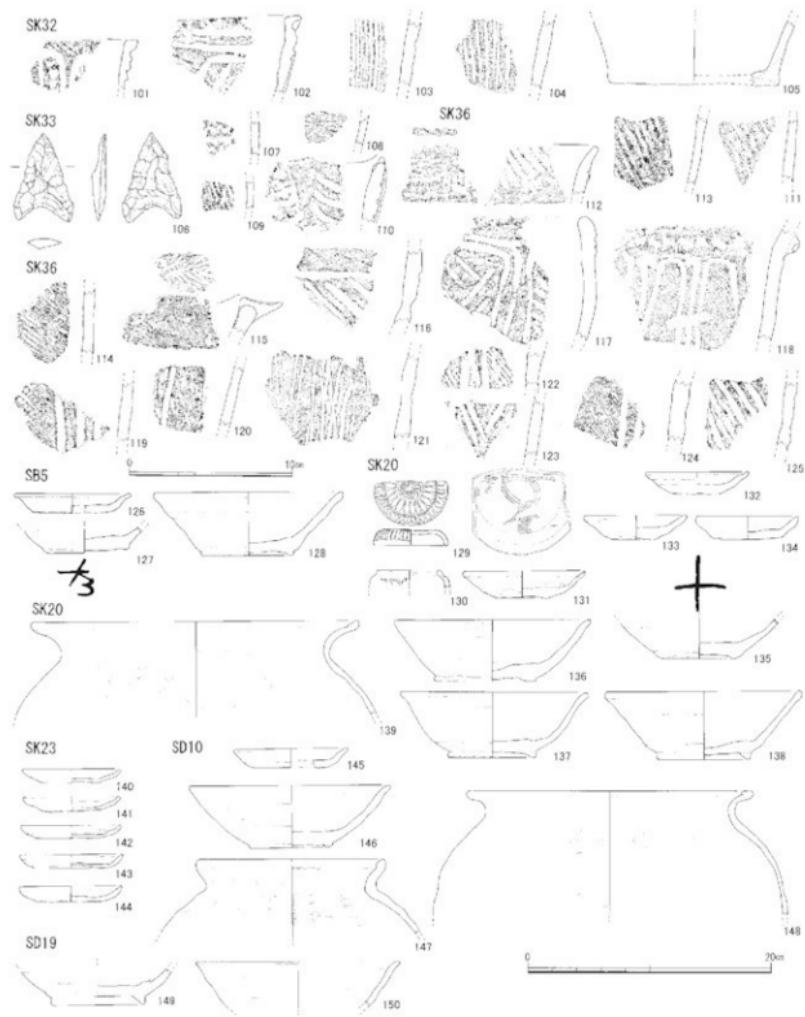
第7図 金生田遺跡SB5・6・7 (1:100)



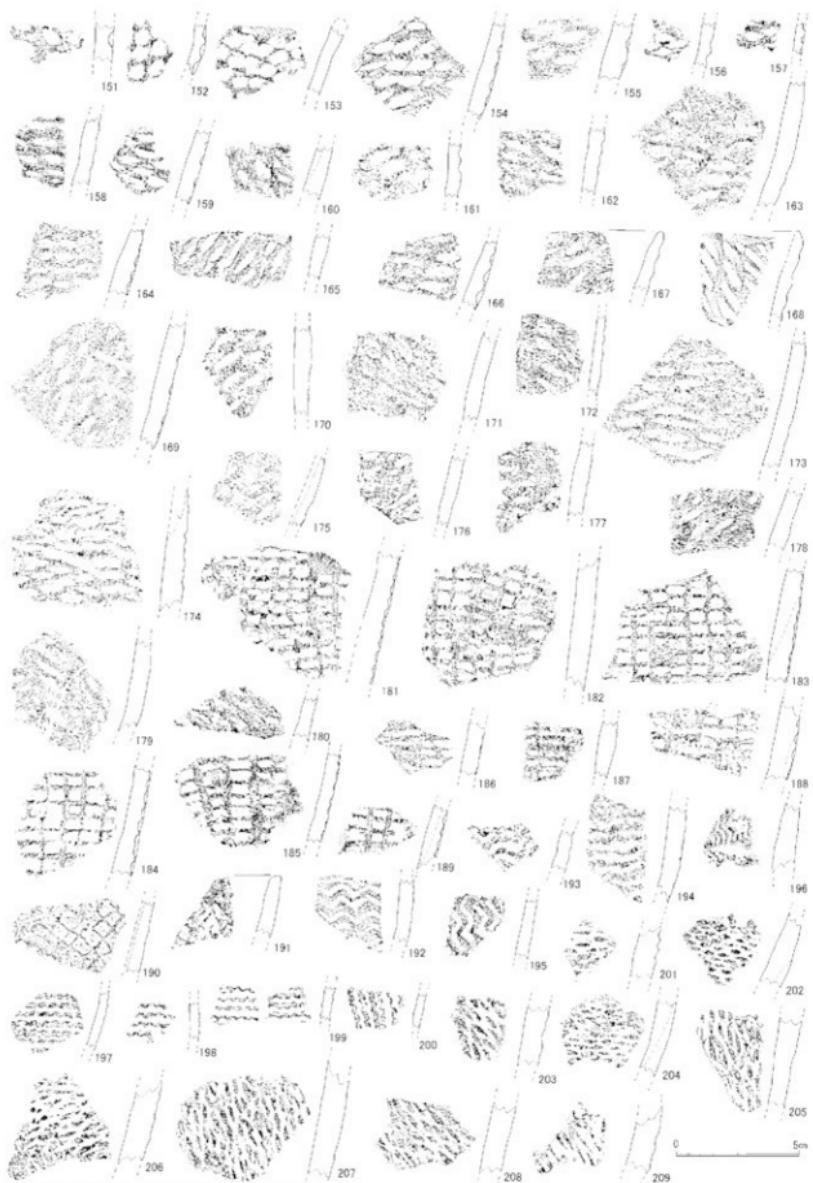
第8図 金生田遺跡出土遺物① (1~6は2:3、13~20は1:4、それ以外は1:3)



第9図 釜生田遺跡出土遺物② (58・88は1:4、68・71は2:3、それ以外は1:3)



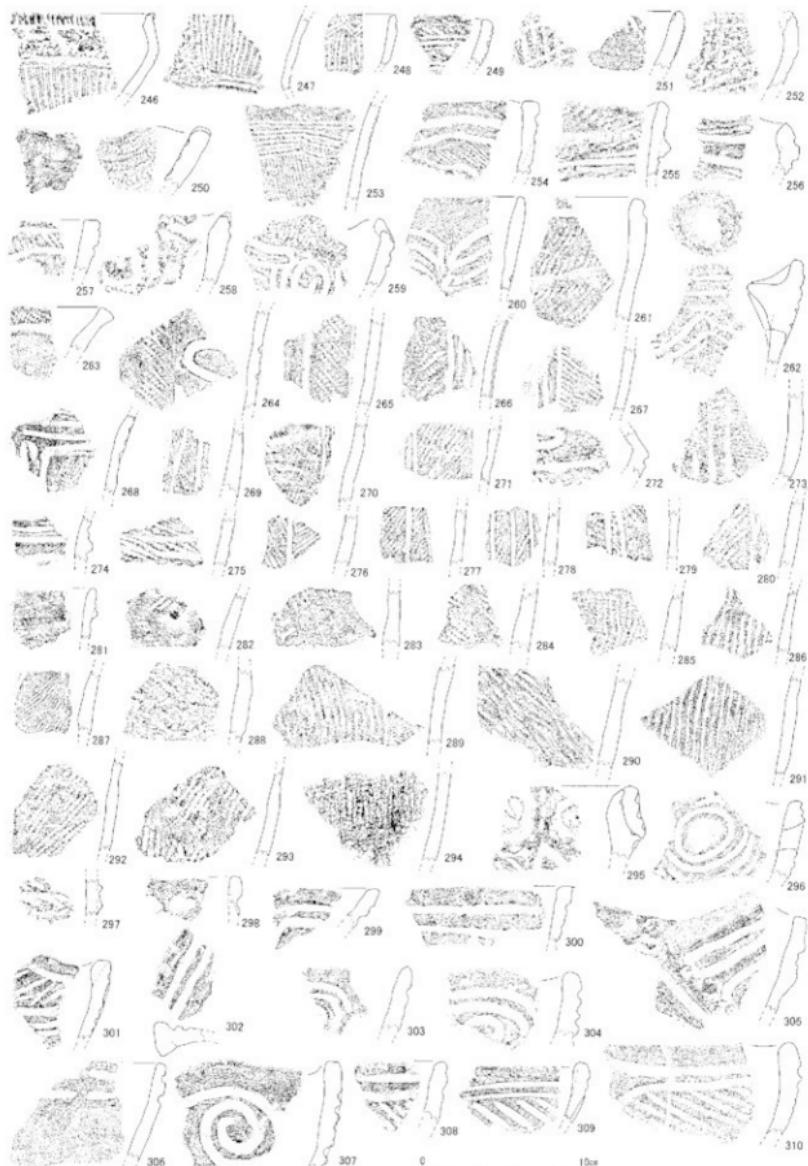
第10図 金生田遺跡出土遺物③ (106は2:3、101~104・107~125は1:3、それ以外は1:4)



第11図 釜生田遺跡出土遺物④ (1 : 2)



第12図 金生田遺跡出土遺物⑤ (210～212・235は1:3、それ以外は1:2)



第13図 釜生田遺跡出土遺物⑤ (1 : 3)



第14図 金生田遺跡出土遺物② (1 : 3)



第15図 金生田遺跡出土遺物⑧ (409・421・425～427・433・434・436～442は1:4、それ以外は1:3)

土坑SK36出土土器 浅い谷状地形のSD11の東側に隣接する土坑である。111は早期・神宮寺式並行の斜格子文、112・113は前期北白川下層IIc～III式頃に並行する土器で、混入と考えられる。あとは、いずれも中末期のもの（114～125）であろう。

以上の土坑はSK27を除き、埋土内の出土土器から所属時期はいずれも中末期頃と推定される。

b 中世前期以降の遺構出土遺物

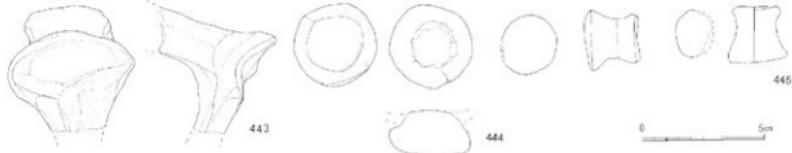
掘立柱建物SB5出土土器 126は渥美系の山皿。127は底部外面に墨書のある渥美系の山茶碗であり、128は知多猿投産であろう。鎌倉初期と推定される。南東隅土坑SK20出土土器 SB5付属の南東隅土坑にあたる。129は蓮華文様に似た花文を持つ合子蓋で、130が身として転用されたと推定される小壺である。どちらも青白磁であるが、色調が異なり本来は別物であろう。131も青磁皿で底部内面に櫛描文がみられる。132～134は渥美産の山皿。135～138は山茶碗で138が知多猿投産のほかは渥美産であろう。これらはSB5出土土器と同様、概ね鎌倉初期頃と推定される。

土坑SK23出土土器 いずれも南伊勢系の土師器小皿（140～144）で、近世のものと考えられる。

溝SD10出土土器 SB5のすぐ北隣を画する幅約1.2m、深さ約0.3mの溝で、145は山皿、146は山茶碗で渥美産、147・148は南伊勢系の土師器鍋である。SB5・SK20と同じく、鎌倉初期頃に属する。溝SD19出土土器 調査区の南端部を画する幅2.0m、深さ0.7m余の溝で、149・150の渥美産山茶碗が出土している。所属時期は平安末期～鎌倉初期頃と推定される。

c 遺構外出土の縄文時代遺物

土器・石器が相当数認められる。まず、土器（土製品を含む）について早期から順にみていきたい。



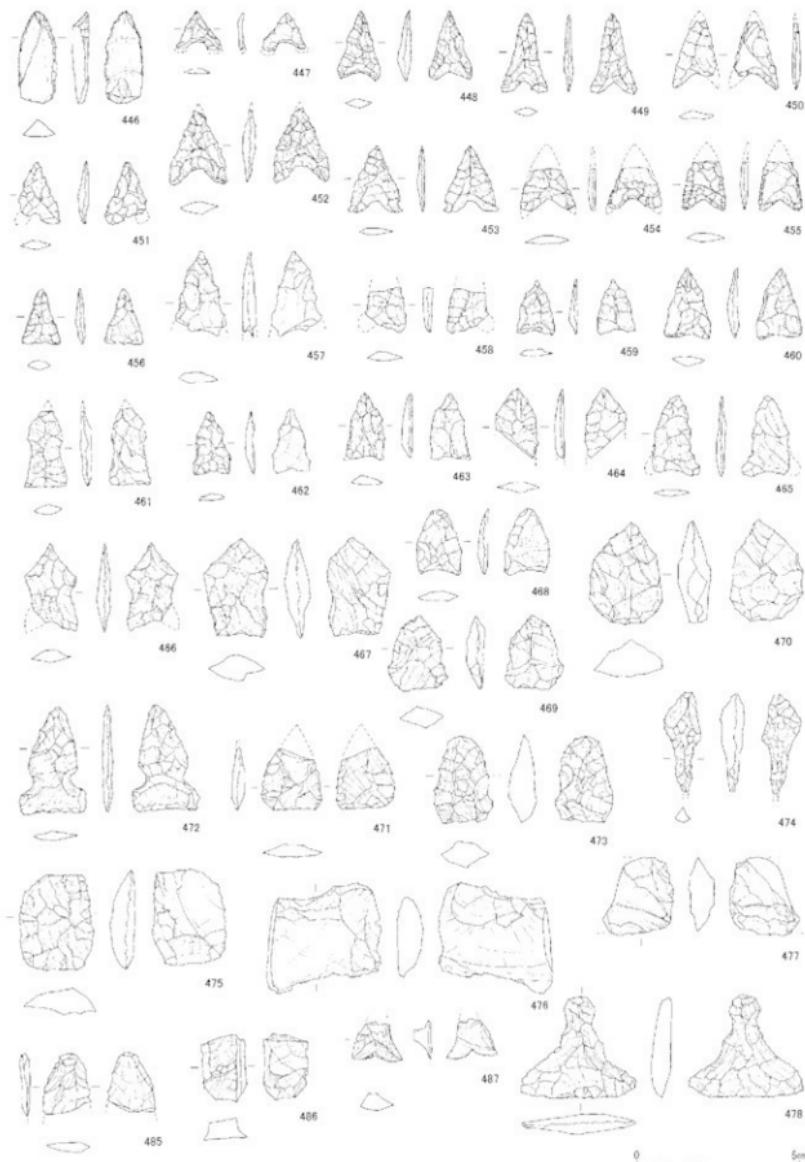
第16図 金生田遺跡出土遺物⑨（1：2）

早期土器には151～214があり、押型文と沈線文（刺突文を含む）に分かれ。押型文にはネガティブ文とポジティブ文がある。前者の中で151の一片のみは大鼻式に相当する枝回転文。152～190・210のネガティブ文は神宮寺式を主体とし、181～190の格子目文の中には一部、先行する大川式を含む可能性もある。191～200の山形文は196までは概ね神宮寺式並行であるが、197～200の小さな山形文は199のような、口縁部に近い両面施文があり、黄島式並行であろう。201～209・211のポジティブな楕円文も内面施文は認められないが、基本的には黄島式と捉えるべきであろう。特に211のような岡上復元可能な当期の資料は稀にしか見られない。212～214は焼成良好な口縁部片で、212と213の2片は沈線文が口縁部文様帶をなし、その下にやや細粒のポジション円文がつく。214は口端外斜面とその直下に刺突が施される。口縁部断面形は内削状ないし丸みを帯びている。これらは田戸系に関連した土器であろう。近畿以西の類例は數少なく、県内では多気町池ノ谷遺跡に次ぐものである。

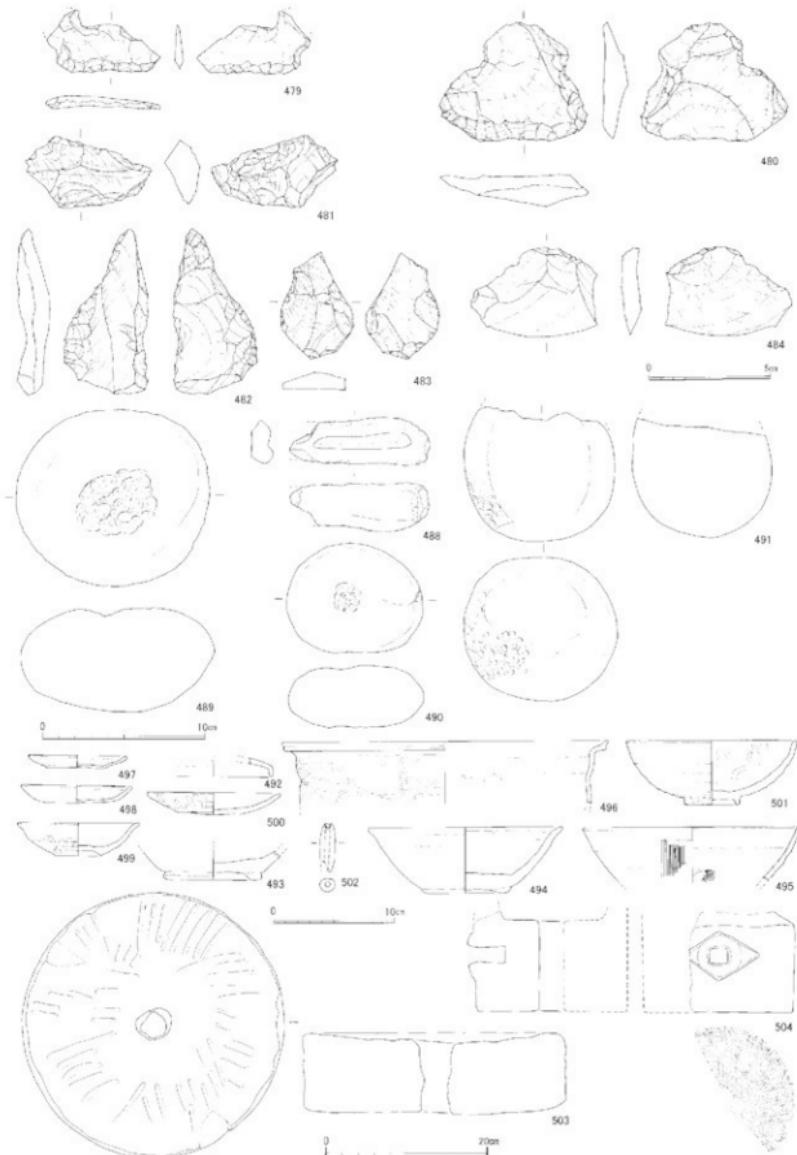
前期の土器は215～245が該当する。このうち215は貝殻腹縁文を横位に施した前葉頃の上広斂式に属し、216も原体は不明であるが、それに準ずるもの。217～221は内外両面に条痕が認められ、前葉に位置づけられる。

222～235は羽状縄文および繩文施文のみのもの。235は底部まで繩文が認められる。238～243は繩文地で突帯上に爪形文を施したり、口端を刻むもの。238は内面施文を作り。これらは北白川下層IIc～大歳山式頃に比定されよう。SD11付近に集中する傾向がある。

246～253は中期初頭から中葉頃までのもので、246～249は竹管を原体とした口縁部文様帶に特



第17図 釜生田遺跡出土遺物⑤ (2 : 3)



第18図 釜生田遺跡出土遺物① (479～484は1:2、488～491は1:3、503・504は1:6、それ以外は1:4)

徵があり、北裏C式の系譜に連なる。251・252は縄文ないし撚糸地に竹管による弧文を描き、船元III式に相当する。253は里木II式並行であろう。250は分厚く、胎土・焼成が堅緻で在地の土器とは異なる。表面は無文で、内面に爪形文が弧状に連続する。東日本系・五領ヶ台II式頃に相当する。

中期末頃の土器は本遺跡の中で最も多く254～396を図示した。これ以外にも小片がかなりある。大別すると、縄文を伴うものと弦線文や条線が主体のもの、隆帯を有するものがある。逐一、触れる説にはいかないが、この中で305・306の2片は注意を要する。305は特異な波状口縁を呈する土器で、文様構成も当地域では類例がない。306は口縁部に横位の短沈線が2列認められるもので、これも中期末の土器ではあまり見かけないが、伊勢湾東岸・晩期前葉の縁帶文土器とは異なり、胎土・色調などの特徴から当期に位置づけるべきであろう。391～396はこの頃の無文土器である。

後期に属する土器は極めて少なく、1～2片しか見られない。397・398がそれで、397は中期末の可能性もあるが、398は後期中葉頃のものであろう。

晩期土器には399～442がある。このうち、399～405は初頭頃に位置づけられる。401は浅鉢で404・405は樅原系（滋賀里系）のものである。401の外面には朱、408の外面にはベンガラの付着が認められる。このほか口端が面取りされ、口縁部の外反する貝殻条痕仕上げの深鉢も、概ね当期と考えられる。この他、後葉頃の五貫森式並行の突帶文土器（431・432）がわずかにみられる。427のような黒色磨研系で、く字形口縁の浅鉢もこれに伴うものであろう。433の折り返し口縁で断面三角形の深鉢の位置づけは難しい。

435～442は底部片であるが、437が中期と推定されるほかは晩期の可能性が高い。434の分厚い小型丸底？土器も同様であろう。

土製品（443～445）は443が鍵形に屈曲した部分で両端部が欠けているので、土器装飾の一部と思われるがはっきりしない。表面は一部欠けているが、Y字形の隆帯が貼付されており、見方によつては簡略な人面？とも解釈できる。445は無文臼形の耳飾りであり、444についてもその可能性があるが、

円形突起の一部かもしれない。

次に石器を取り上げたい。

446は小さな凝長剥片素材の形状を変えず、先端部にプランティングを加えたもの。一次剥離面のままの左側辺には刃こぼれがみられる。他に確実な旧石器時代のツールなどが認められないので、ナイフ様石器とした。チャート製。本遺跡ではこれだけが唯一、旧石器の可能性がある。

石鎌（447～473）は凹基式と平基式に分かれ。前者には微小鎌（447）や先端部をより尖銳にしたもの（448・449）があり、後者には長五角形鎌（459～467）やいわゆるアメリカ式石鎌（472）がある。469・470は未製品的なものであろう。石材は448・452・473がチャートのほかはすべてサヌカイト。

474は石錐、475～477は楔形石器、478～480は石匙、481～483は削器であり、あとは剥片である。このうち、482・485はチャート、486・487は黒曜石であり、あとはサヌカイトである。黒曜石については製品は認められない。

この他、489～491は敲石、488は有溝砥石である。

d 遺構外出土の古代以降の遺物

古代の遺物は奈良時代頃の須恵器杯蓋片が1点（492）ある。中世遺物では鎌倉初期頃の渥美産山茶碗（493・494）と内外両面に櫛描文を施した青磁碗（495）がみられる。496は16世紀後半の土器鍋。

近世遺物には南伊勢系の土器小皿（497～499）、陶器椀（501）、同小皿（500）がある。この他、土鍤（502）、茶臼（504）、穀摺用石臼・下臼（503）があるが、厳密な所属時期は不明である。

5 小結

縄文時代では、早期と推定される陥し穴1基と竪穴住居が中期末3棟、晩期初頭1棟のほか、中期末を中心とした土坑群の形成が確認された。これらの遺構は古田川に張り出す台地の北西端部に集中し、調査区から外れた東側の台地北端部にも拡大の様相がうかがえる。従って、今次調査の成果は部分的なものであるが、特に、中期末葉についてはこの頃の小集落の特質を示しているように思われる。また、晩期初頭の竪穴住居は県域ではまだ明確な類例がなく、最初の検出事例となった。

出土遺物では、早期から晩期にいたる各期の土器

が確認された。この中では早期・黄島式並行の良好な深鉢と小片が多いものの中期末葉の資料が注目される。今後は、これらの資料をもとに、中村川流域を一領域とした縄文遺跡の動向を究明していくこと

が課題であろう。

中世前期以降では掘立柱建物 5 棟、井戸 1 基、溝などが検出された。推定される集落範囲の中ではほぼ西端部の様子が判明した。(奥)

遺構番号	性格	時期	グリッド	調査時遺構名	規模		主軸	方位 (N 基準)	備考
					東西間 (m)	南北間 (m)			
SH 1	竪穴住居	縄文中期初頭	ケ 40・46	SB 1					中央部に石器炉の一部と焼土
			コ 44・45・46	SB 1					
			ケ 46	SK 1 (上面)					
			カ 46	SB 1					
SH 2	竪穴住居	縄文中期末		SB 1					
SH 3	竪穴住居	縄文中期末	Y 37・38	SB 1					
SH 4	竪穴住居	縄文中期末	ウ 28	SB 1					
			エ 28・29	SB 1					
SB 5	竪柱建物	縄倉	カ 47 P2	サ 49 SB 1	6(13.2) X	4(7.6)	東西	N2° W	
SB 6	竪柱建物	縄倉	コ 47 P2						
			コ 49 P1						
SB 7	竪柱建物	縄倉	セ 48 P2		3(6) X	2(4)	東西	N2° W	
			セ 49 P2						
SB 8			ス 48 P2・P7						
			セ 49 P3		3(6.4) 以上 X	3(8)	東西	N2° W	
			シ 49 P2						
SB 9	不明		エ 42 P2・P3		2(1.6) X	3(5.4)	南北	N11° W	
			ウ 42						
SD 10	溝	縄倉	ケ 46～49	SD 1					
			コ 45～47	SD 1					
			ケ 48	溝					
	溝	不明	コ 44	SD 1					SD 10のことか
SD 11	谷状地形	不明	エ・オ 32	大溝					
			イ 33	旧河道					
			エ・オ 31	旧河道					
			オ 34	旧河道					
			オ 32・33	旧河道(底)					
SD 12	溝	不明	オ 26	SD 1					
SD 13	溝	不明	オ 25	溝1					
SD 14	溝	不明	オ 27	溝2					
SD 15	溝	不明	ウ 41	SD 1 大溝					
SD 16	溝	不明	キ 48	SD 3					
SD 17	溝	不明	イ・ウ 41	SD 1					
SD 18	溝	不明	カ 24	SD 1					
SD 19	溝	縄倉	ツ 48	SD 1					A 地区
SK 20	土坑	縄倉	ヒ 49	SD 1					
SK 21	土坑	不明	サ 49	SK 1					SB 5 の南東隅土坑
SK 22	土坑	不明	コ 50	SK 1					
SK 23	土坑	不明	セ 48	SK 1					
SK 24	土坑	縄倉	ツ 48	SK 1					
SK 25	土坑	不明	V 48	SK 1					
SK 26	土坑	不明	V 44	SK 1					
SK 27	土坑	縄文	イ 48	SK 5					
SK 28	土坑	不明	V 39	SK 1					
SK 29	土坑	不明	W 39	SK 1					
SK 30	土坑	不明	X 38	SK 1					
			Y 37	SK 1.0					SK 30 と解釈
			Y 37	SK 2					
SK 31	土坑	縄文中期末	Y 36	SK 2					
SK 32	土坑	縄文中期末	Y 36	SK 1					
SK 33	陥し穴	縄文早期	ア 37	SK 3					
SK 34	土坑	不明	エ 29	SK 4					
SK 35	土坑	不明	エ 28	SD 1					
SK 36	土坑	縄文中期末	ウ 34	SK 1					
SK 37	土坑	不明	エ 34	SK 1					
SK 38	萬樹木痕	不明	ツ 33	SK (萬樹木)					
SK 39	土坑	不明	イ 38	SK 1					
SK 40	土坑	不明	ア 40	SK 1					
SK 41	土坑	不明	W 42	5 K 2 (漂石)					
SK 42	土坑	不明	イ 44	SK 1					
SE 43	井戸	縄倉	ア 48						

第2表 金生田遺跡遺構一覧表

III 東野B遺跡

1 調査の経過と調査区の立地

東野B遺跡は松阪市嬉野森本町に所在する遺跡である。昭和62年度県営圃場整備事業（中郷）地区に伴って発掘調査が実施された。調査は昭和62年4月27日から開始し、9月15日に終了した。調査面積は5,700m²である。遺跡は中村川右岸の標高35～37m程の河岸段丘上に位置する。

2 遺構

（1）縄文時代

①竪穴住居

中期末葉の竪穴住居2棟を確認した。

竪穴住居SH1・2 調査区の中央近くで検出した2棟の円形の住居。SH1は径4m、深さ15cm程で、埋土から中期末葉の土器などが出土した。SH2は径4.3m、深さ10cm程で、柱穴らしい小穴も確認できる。埋土から中期末葉の土器などが出土した。

②土坑

土坑SK3 1.1×1.1mの不定形の土坑。埋土にやや扁平な川原石を含む。埋土から縄文時代中期末葉の土器がまとまって出土した。

③焼土坑・炉跡

2か所を確認した。

SK4 埋土に焼土を多く含む。炉跡の可能性もある。埋土から早期・中期末～後期初頭の土器などが出土した。

炉跡SF6 川原石を方形に組んだ石囲いの炉と考えられる。石に囲まれた部分から炭化物が出土した。炉跡SF9 1.6×0.6mの楕円形の土坑。埋土にやや扁平な川原石と焼土を含む。出土遺物がすべて縄文時代早期の遺物であるので一応、早期の遺構とした。

④埋甕

1か所を確認した。

埋甕SX8 中期末葉ごろの深鉢を正位に埋設する。口縁部は欠損している。掘形は確認できなかった。

（2）古墳時代後期から奈良時代

①竪穴住居

竪穴住居SH10 長辺5.3m・短辺4.3m、深さ10cm程

の竪穴住居。埋土から土師器の椀・杯・甕が出土した。

竪穴住居SH11 長辺5.3m・短辺4.3m、深さ10cm程の竪穴住居。埋土から土師器の椀・皿・杯・長胴甕・甕・須恵器蓋が出土した。

竪穴住居SH12 長辺5.4m・短辺5.0m、深さ20cm程の竪穴住居。北辺の中央付近に竈がある。住居の埋土から土師器椀・甕・長胴甕が出土した。

竪穴住居SH13 長辺5.5m・短辺4.4m、深さ10cm程の竪穴住居。北辺の中央付近に竈がある。住居の埋土から土師器甕が出土した。

竪穴住居SH14 一辺5.8m、深さ25cm程の竪穴住居。中央部に軸線の違う方形の窪みがあり、2棟の住居が重複している可能性が高い。

竪穴住居SH15 長辺5.3m・短辺4.9m、深さ30cm程の竪穴住居。北辺の中央付近に竈がある。埋土から土師器甕・長胴甕・須恵器杯・甕・甕が出土した。

竪穴住居SH16 長辺4.1m・短辺3.6mの竪穴住居。北辺のやや東よりに竈がある。埋土から土師器椀・長胴甕・甕・須恵器甕・甕が出土した。

竪穴住居SH17 長辺4.2m以上・短辺3.9m、深さ20cmの竪穴住居。北辺のやや東よりに竈がある。埋土から土師器椀・甕・長胴甕・甕・須恵器杯・甕・甕が出土した。

（3）中世

①掘立柱建物

中世の掘立柱建物を6棟確認した。ほとんどが中世後期の遺構と思われる。

掘立柱建物SB54 3間×3間の総柱建物。柱穴から土師器皿・鍋・常滑製品の甕が出土した。

掘立柱建物SB55 3間×2間の建物。東側の1間分は庇か土間と思われる。柱穴から土師器の皿・鍋・山茶椀片が出土した。

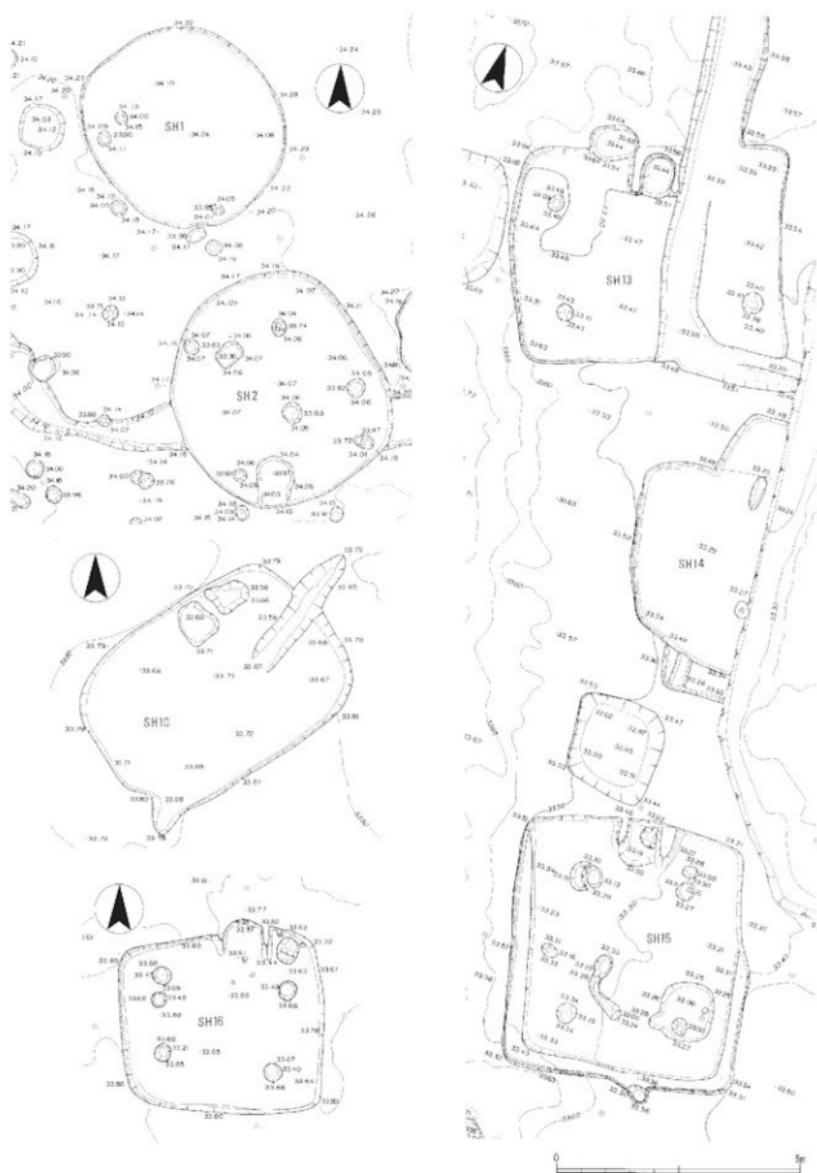
掘立柱建物SB56 3間×2間の建物。平面形は正方形に近い。

掘立柱建物SB57 2間×2間の総柱建物。一部の柱穴には根石が残る。

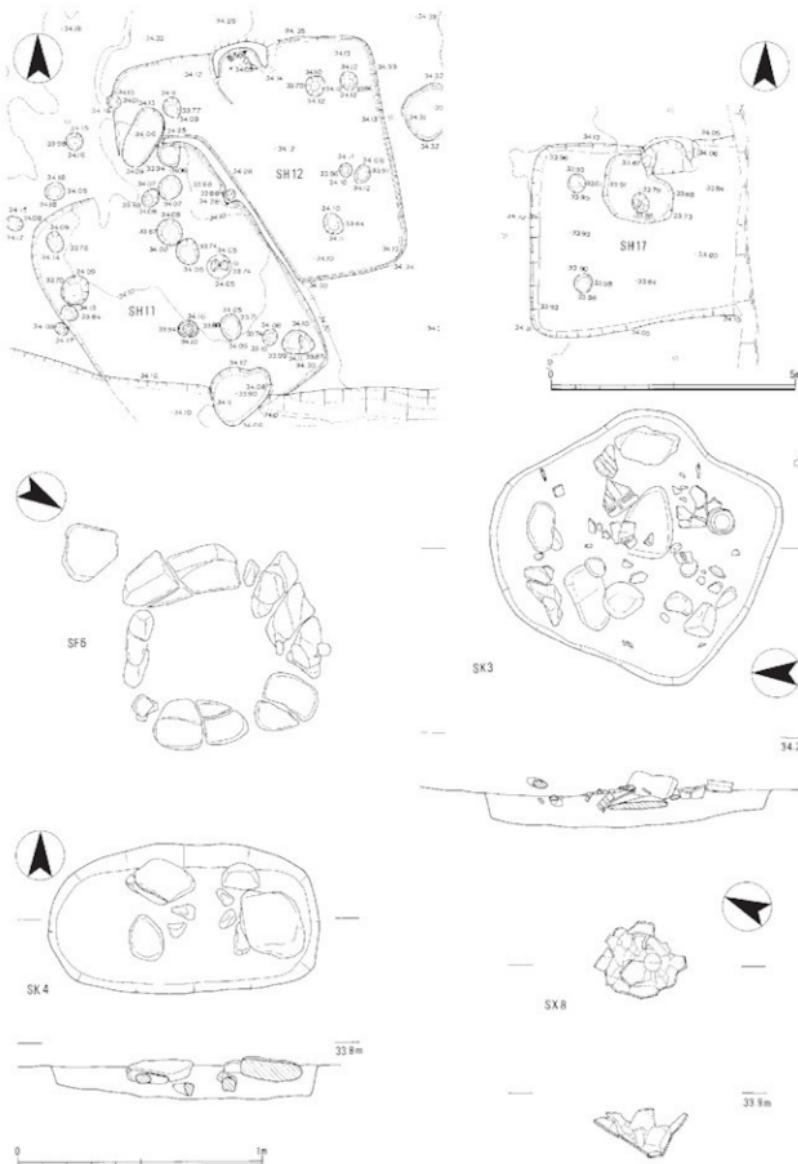
掘立柱建物SB58 3間×2間の建物。南側の柱筋



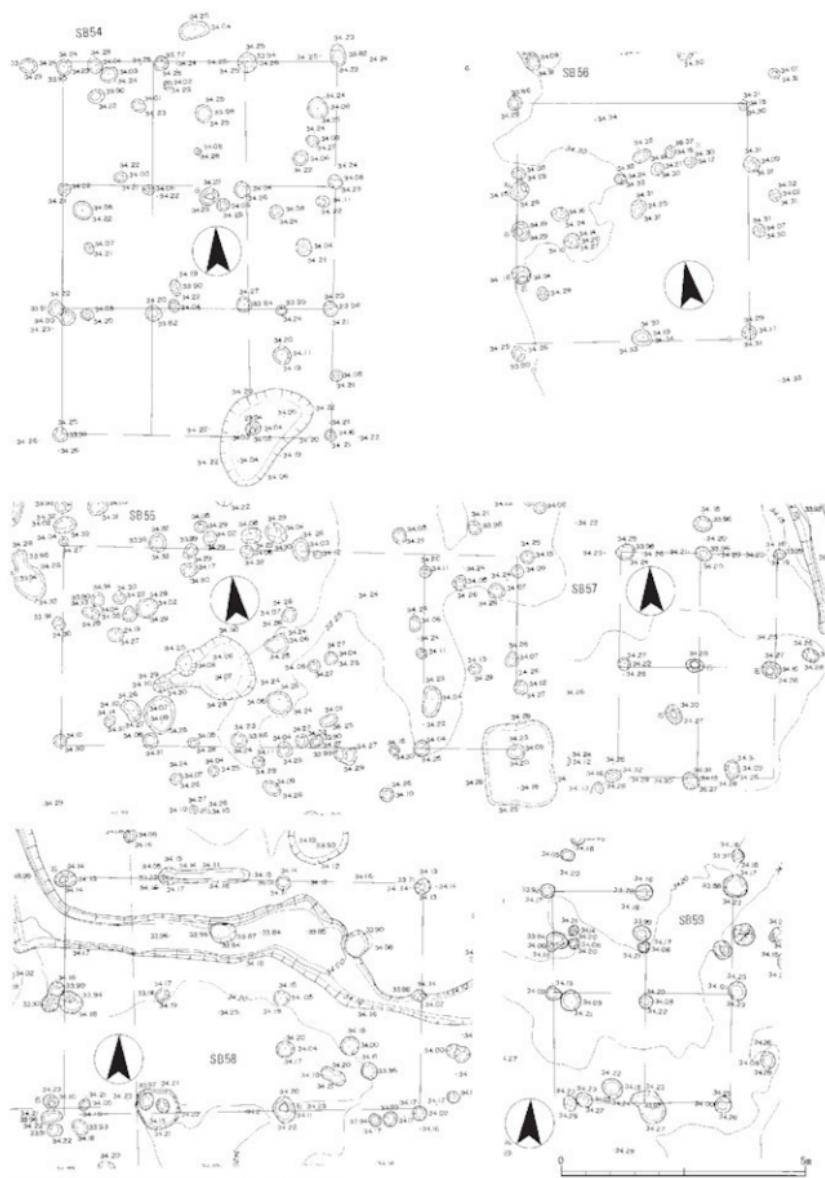
第19図 東野B遺跡遺構平面図（1:600）



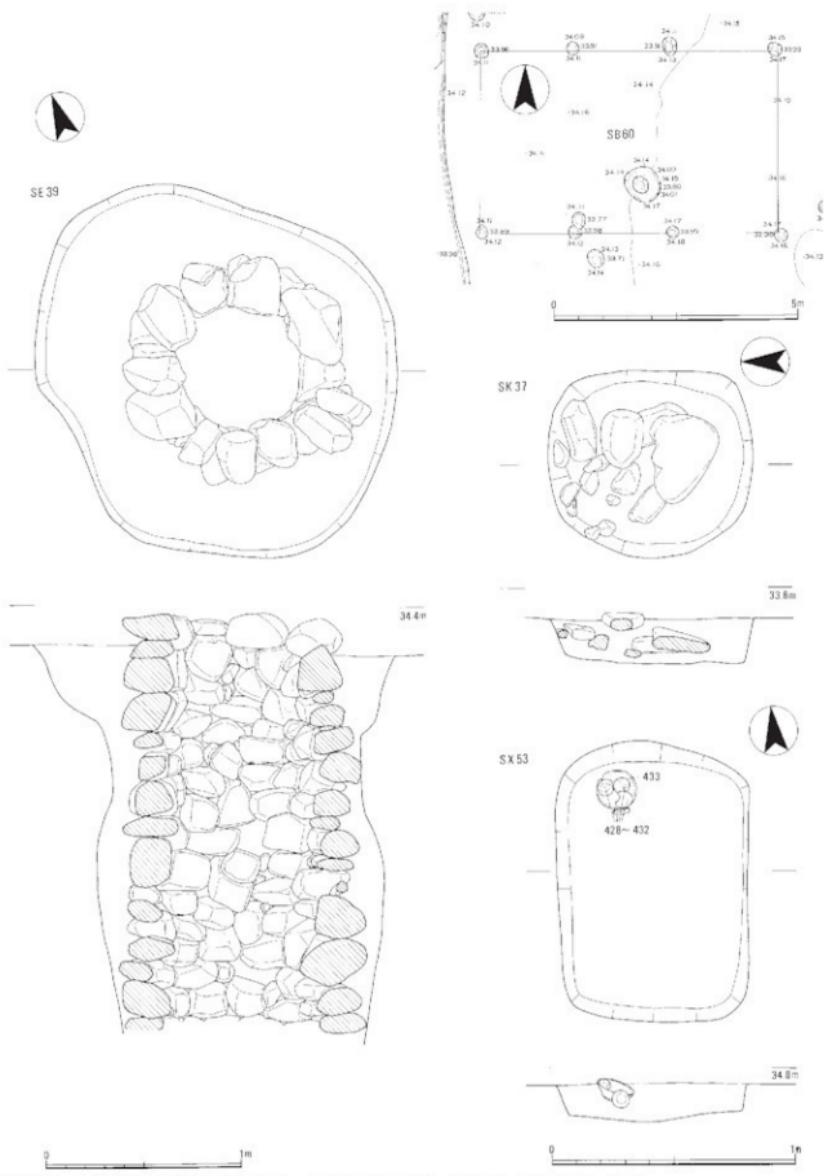
第20図 東野B遺跡SH1・2・10・16・13~15 (1:100)



第21図 東野B遺跡SH11・12・17 (1:100)、SF6・SK3・4・SX8 (1:20)



第22図 東野B遺跡SB 54～59（1：100）



第23図 東野B遺跡SB60 (1:100)、SE39 (1:25)、SK37・SX53 (1:20)

が明瞭ではない。柱穴から土師器皿などが出土した。
掘立柱建物 S B59 2間×2間の純柱建物。S B58
と並んで建てられており、その付属建物と思われる。
柱穴から土師器皿が出土した。

掘立柱建物 S B60 3間×1間の建物。

②井戸

2基の井戸を確認した。このうち1基（S E 39）
は石組み、もう1基（S E 38）は素掘りの井戸である。

③土坑

中世の土坑を17基確認した。例としてS K37を
図示する。これらの多くには埋土に川原石を含む。
また、埋土に炭化物や焼土を含むものもあることから、火葬穴になるものも含まれている可能性がある。
土坑のうち、S K20からは鉄滓が、S K23からは鐵羽口と鉄滓が出土した。

④溝

屋敷地の区画溝を検出した。このうちSD40からは
は鐵羽口と鉄滓が、SD41・42・43・44・48・49から
は鉄滓が出土した。

⑤土坑墓

墓S X53 長辺115cm×短辺79cmの長方形の土
坑の片隅から、山茶椀・皿などがまとめて出土し
た。遺物の組成や出土状況から土葬墓と考えられる。

⑥火葬穴

火葬穴S X21 埋土に炭化物や焼土を含み、壁面が
焼けている。中世後期の火葬穴の可能性が高い。

（竹田）

3 遺物

（1）縄文時代

①竪穴住居S H 1出土遺物

沈線文主体の中世末葉の土器（4～19）が認められる。早期のネガティブな押型文土器（1～3）は混入であろう。

②竪穴住居S H 2出土遺物

S H 1と同様、中世末葉の土器（24～38）が少しある。鋭く尖らせた石鎚（20）や早期の押型文土器（21～23）は混入の可能性が高い。

③土坑S K 3出土遺物

中世末葉の土器（39～61）がややまとまっている。
口縁部および体部（39～46・49など）は同一個

体であろう。底部片（60・61）はいずれも平底で、
網代圧痕を残す。

④土坑S K 4出土遺物

土器には早期・押型文土器（66～70）と中期末
～後期初頭のもの（71～75）があり、遺構の所属時
期は決めがたい。石器も似た様相で、左右不对称の
石鎚（62）、同未製品？（63）、切目石鎚（64）、凹石（65）
がある。

⑤土坑S K 5出土遺物

早期・押型文（76）と中・後期ごろの条痕文（77）
の2片があるので決手を欠く。

⑥埋甕S X 8

条痕地に4本1単位の弱い垂下沈線を有する深
鉢（78）を埋甕として用いた。内面にも全面条痕調
整を施す。口縁部を欠くので、型式比定は難しく、
おおよそ中期末葉ごろと推定される。

⑦炉跡S F 9出土遺物

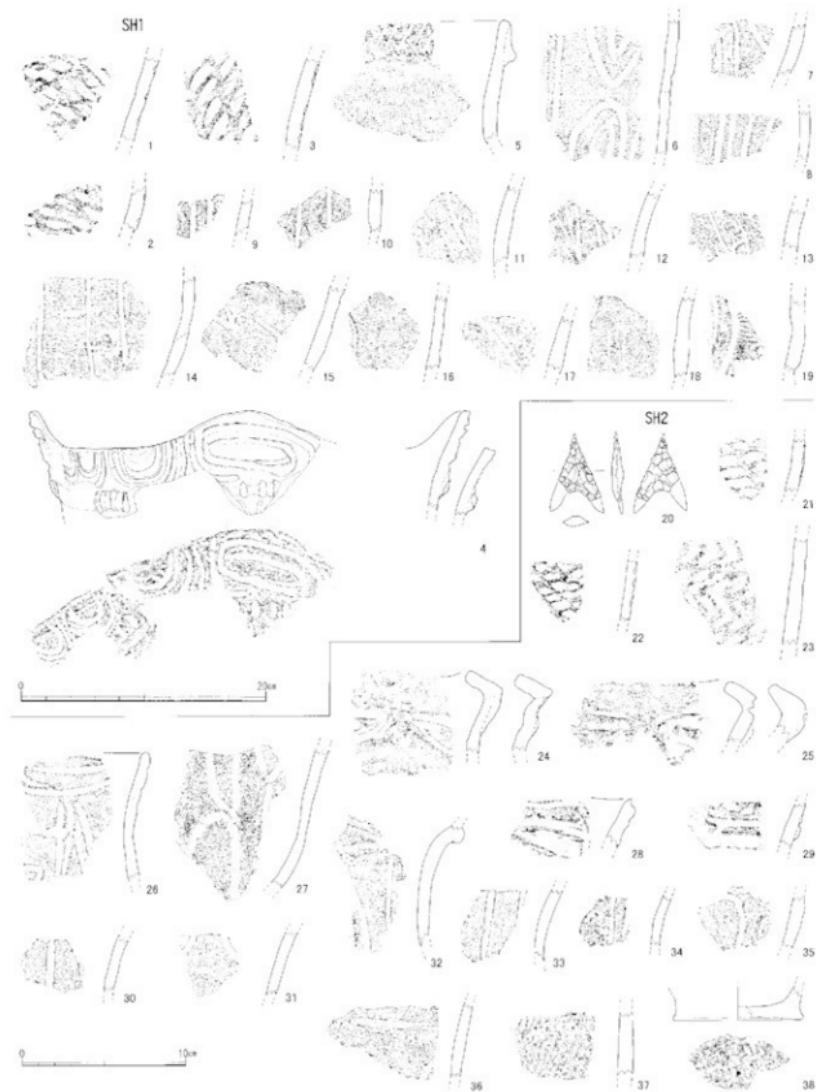
格子目状のネガティブな押型文（79～84）がやや
まとまっている。最低2種類の原体に分かれ、施文
の深さでも異なる。82～84は神宮寺式併行と思
われるが、79～81は先行する可能性もある。

⑧包含層出土遺物

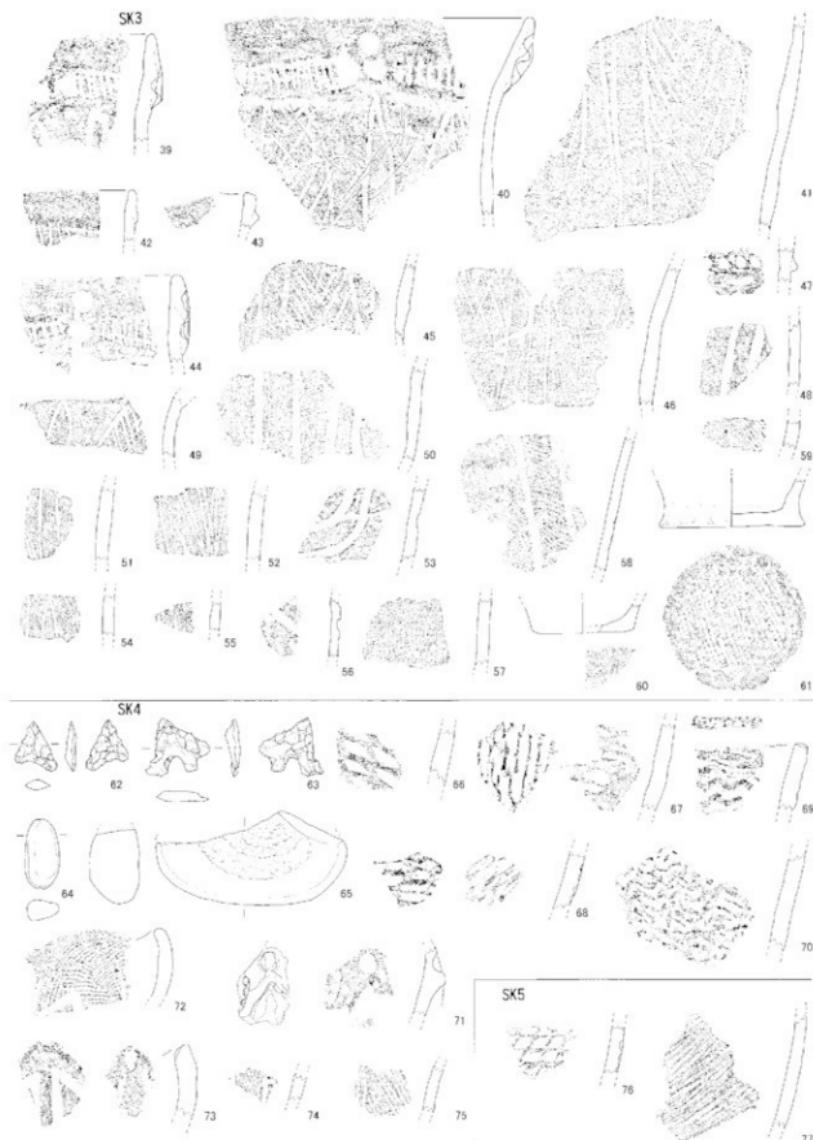
土器は早・中・後期に分かれる。早期には85～
132が含まれる。このうち、ネガティブな押型文土
器のグループは、大別して大川式の新相（85～88）
と神宮寺式併行のもの（89～93・96～119）である。
95は前者より先行する可能性がある。94・120～
123の格子目文や124～127の山形文は概ね後者
に併行ないし後続するものであろう。128の変形山
形文は後続するタイプに含まれるが、県内では珍し
い例である。129・130はポジティブな楕円文で高
山寺式ごとのものと推定される。131は早期・沈線
文系の土器と解釈したが、確証はない。132はやや
厚手の織維を含む土器である。

中期前半のものは133が北裏C式併行、134は
船元III式ごろの2片だけで、135～160などほと
んどが末葉に属する。このうち、140・150のよう
な口縁部片は北白川C式に特徴的なものである。

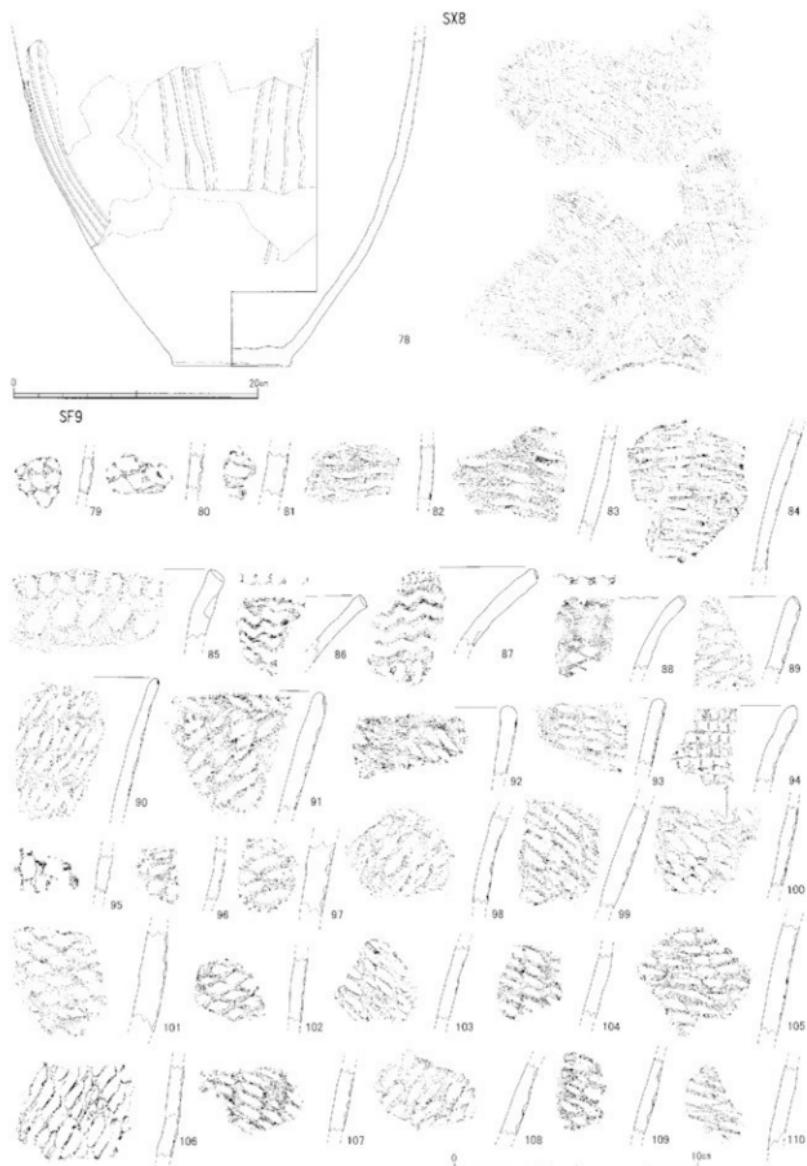
後期のものは161～182が初頭ごろの磨消ないし
充填縄文片で、これ以外は底部片（296～301）を
除き184～295のほとんどが前葉ごろの縁帶文土



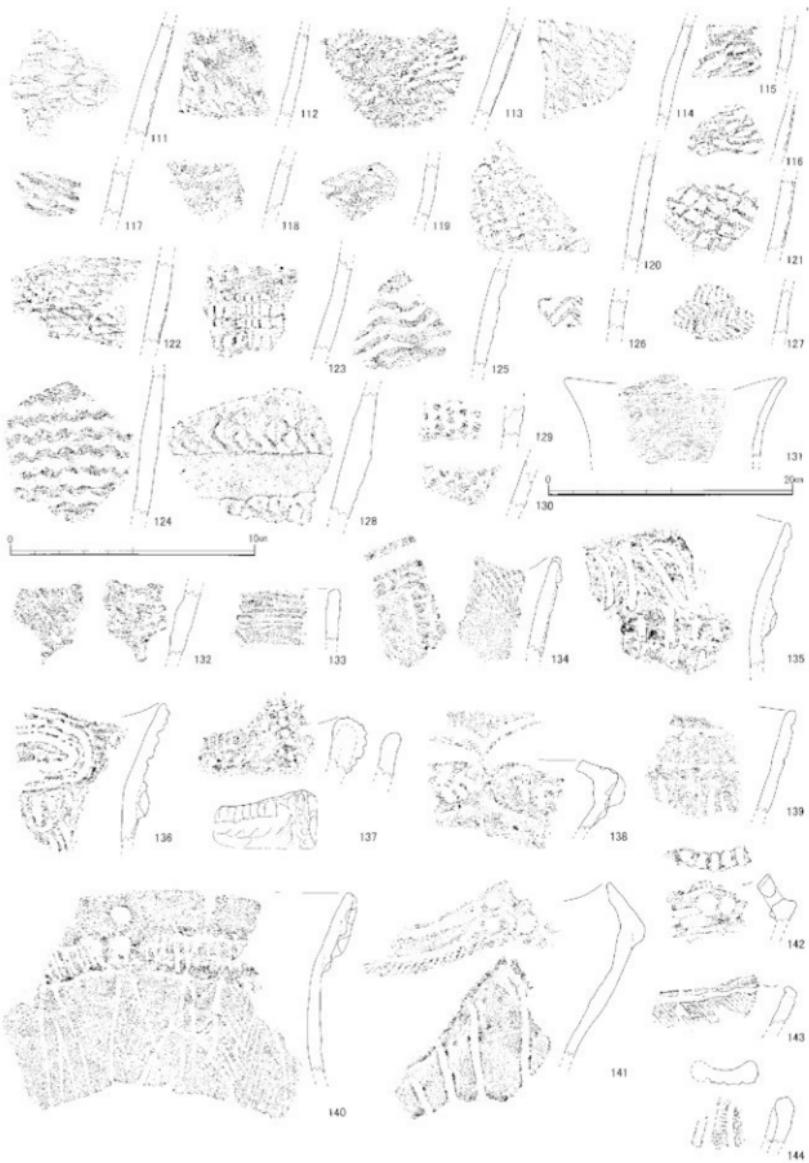
第24図 東野B遺跡出土遺物① (1~3・21~23は1:2、20は2:3、4・38は1:4、それ以外は1:3)



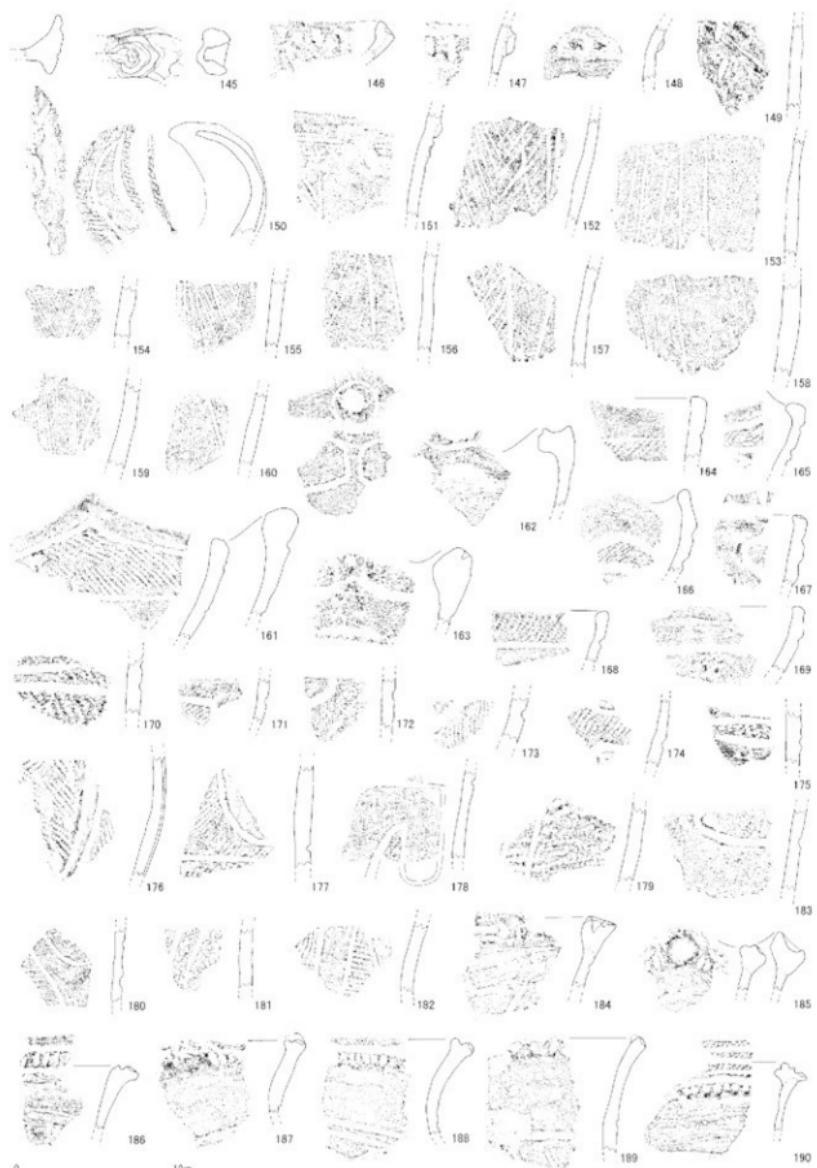
第25図 東野B遺跡出土遺物② (60・61は1:4、62・63は2:3、66～70・76は1:2、それ以外は1:3)



第26図 東野B遺跡出土遺物③ (78は1:4、それ以外は1:2)



第27図 東野B遺跡出土遺物④ (111～130は1:2、131は1:4、それ以外は1:3)



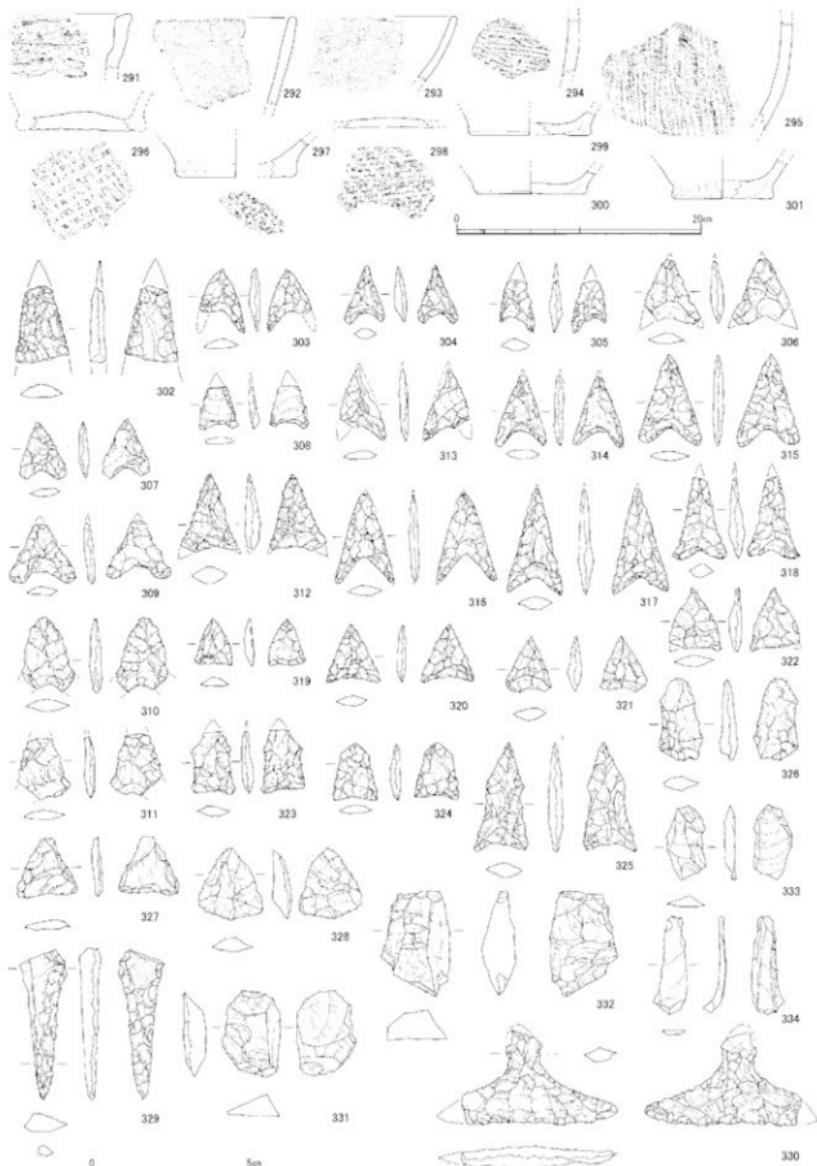
第28図 東野B遺跡出土遺物⑤ (1 : 3)



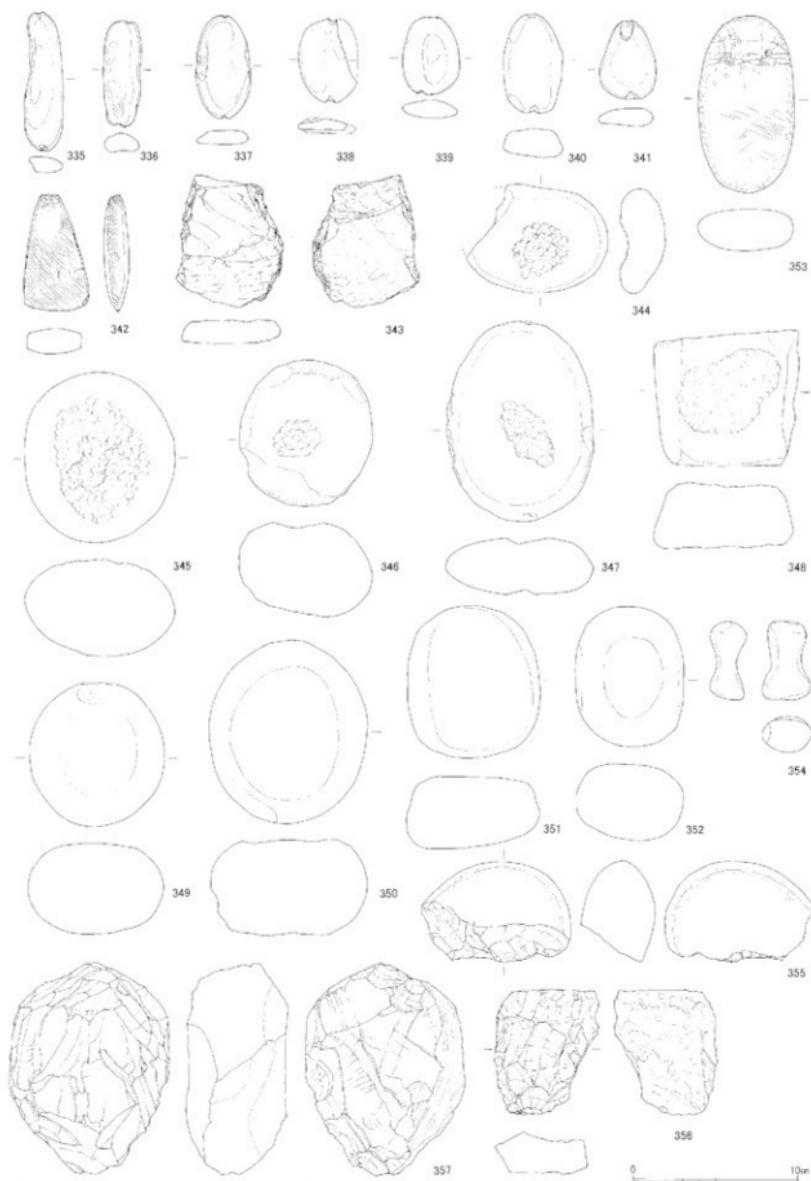
第29図 東野B遺跡出土遺物⑥ (199・208は1:4、それ以外は1:3)



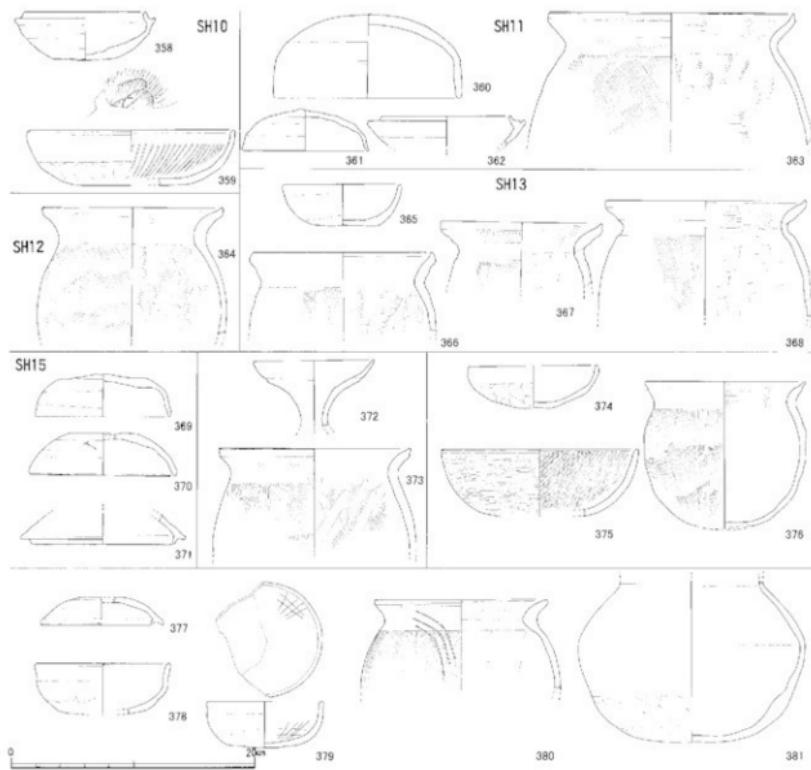
第30図 東野B遺跡出土遺物⑦ (1:3)



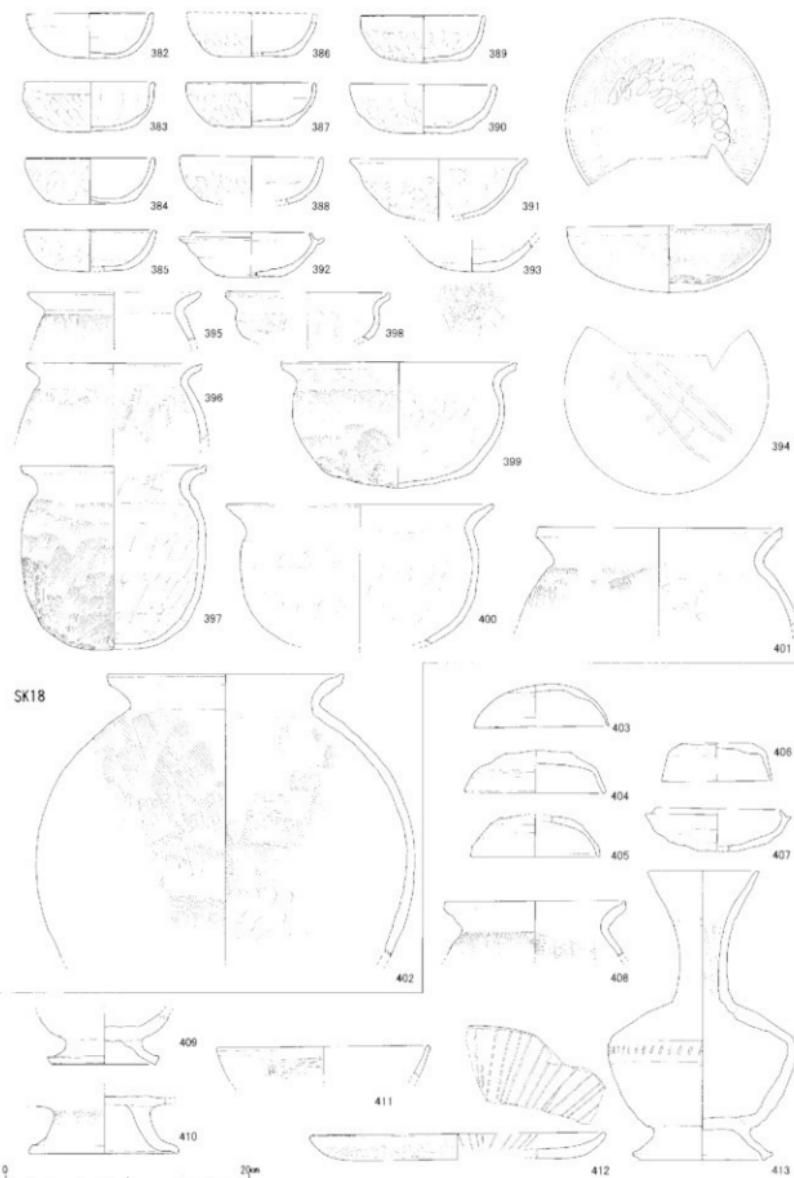
第31図 東野B遺跡出土遺物⑧ (291～295は1:3、296～301は1:4、それ以外は2:3)



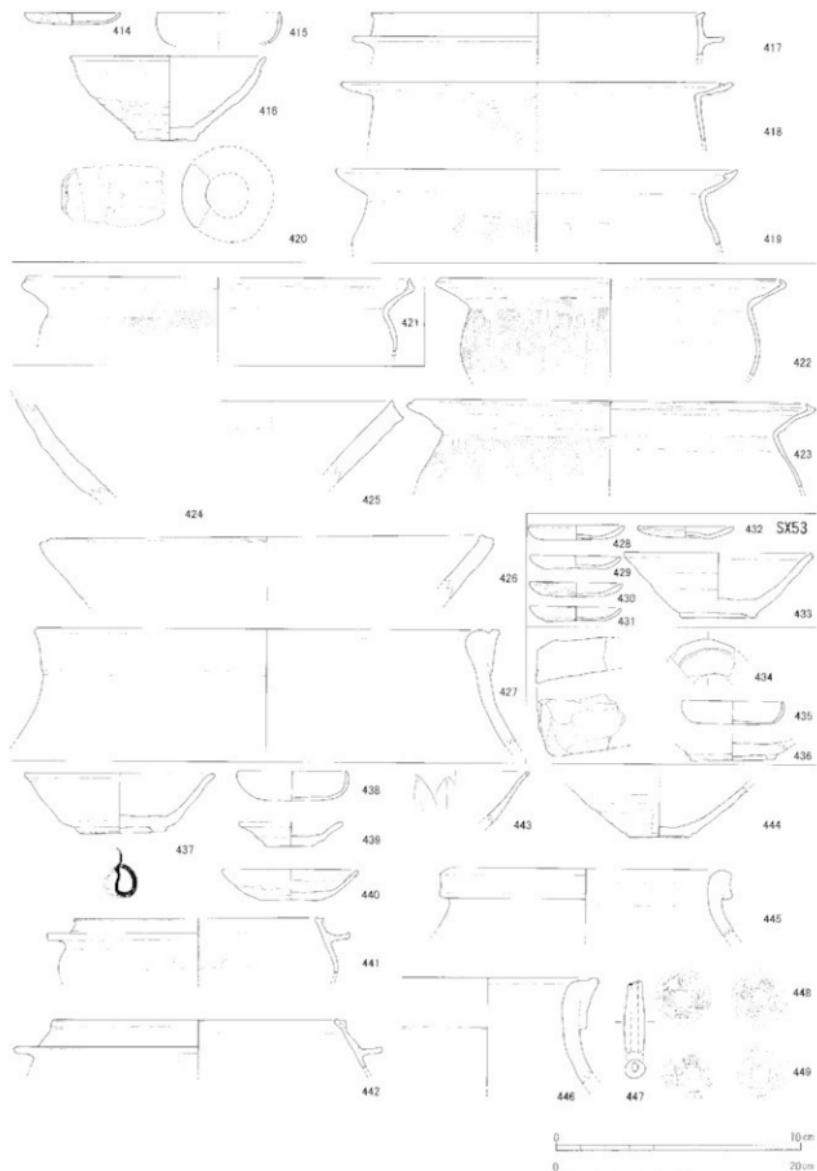
第32図 東野B遺跡出土遺物⑨ (1 : 3)



第33図 東野B遺跡出土遺物⑩ (1:4)



第34図 東野B遺跡出土遺物① (1:4)



第35図 東野B遺跡出土遺物② (447~449は1:2、それ以外は1:4)

器成立前後を中心としている。ただし、205～211の线条文や220の刺突文などは中期末葉のものを含む可能性がある。なお、草創・前・晚期の土器は認められない。

次に、石器について一瞥しておきたい。

302は木葉形尖頭器片と推定され、唯一、草創期の可能性がある。303～328は石礫とその未製品である。四基式がほとんどで、平面形では二等辺三角形の比較的精緻な調整を施したもののが目に付く。の中には神宮寺式に対応するものが含まれるであろう。329は石錐、330は石匙、331・332は楔形石器、333・334は剥片。石材は302・312・333・334がチャート、327は片岩、あとはサヌカイトである。

335～341は石錐。はじめの5点が切目、残り2点は打欠きである。342は定角石斧、343は打製石斧片、344～348は凹石、349～352は磨石、353は扁平な楕円碟の片面の一端に線刻を入れている。線刻は筆順でみると、先ず2～3本の横線を引いて区画を作り、左右ほぼ対称となる小円が3つずつ施される。横線付近から端部にかけては縦・横・斜めに弱々しい細線も認められる。裏面には確実な線刻は認められない。碟面は鉄分が一樣に沈着し、赤っぽい。広い意味では、一種の岩偶であろうか。繩文早・後期土器以外に、近世陶器をも含むSK30からの出土であるが、早期・押型文土器期に属する可能性が高い。354は碟の中央がくびれた形の自然石で、片方の端面が心もち磨れているようにも見える。355は片面加工の碟器、356・357はサヌカイトの石核で片面から側面にかけて自然面を留める。(奥)

(2) 古墳時代後期から奈良時代

① 穴住居SH10出土遺物

時期幅が広い。土師器杯(359)と須恵器杯身(358)がある。

② 穴住居SH11出土遺物

須恵器杯蓋(360・361)・杯身(362)、土師器甕(363)がある。いずれも7世紀前半のものである。

③ 穴住居SH12出土遺物

土師器甕(364)は、頸部から口縁部にかけてが肥厚する。

④ 穴住居SH13出土遺物

土師器椀(365)はやや深めで、底部から口縁部

がやや内窓する古い要素と、底部が明瞭な新しい要素を併せ持つ。甕類(366～368)はいずれも器壁が薄く、頸部の屈曲が強い。

⑤ 穴住居SH15出土遺物

須恵器杯蓋(369・370)・杯身(371)・甕(372)、土師器長胴甕(373)がある。370にはヘラ記号がある。

⑥ 穴住居SH16出土遺物

土師器椀(374)は器壁が薄く、丸みを帯びている。杯(375)は外面にヘラ磨きを、内面に暗文を施す。376は小型の甕。

⑦ 穴住居SH17出土遺物

須恵器杯蓋(377)、土師器椀(378)・杯(379)・甕(380・381)がある。378は平底に近く、口縁部にかけてのラインが直線的である。379の内面には暗文が残る。

⑧ 土坑SK18出土遺物

土師器椀(382～391)、杯(394)、甕類(395～402)、須恵器杯身(392)がある。椀類は平底のものが多い。甕類の頸部から口縁部は、やや肥厚するもの(397)と強く屈曲するもの(398)がある。

⑨ 包含層出土遺物

須恵器杯蓋(403～407)、長頸甕(413)、土師器甕(408)、高杯(409・410)・杯(411)・皿(412)がある。

(3) 中世

① 井戸SE38出土遺物

土師器小皿(414)・皿(415)・鍋(417～419)、瀬戸美濃製品の灰釉平椀(416)、鞆の羽口(420)がある。概ね15世紀中葉のものである。

② 井戸SE39出土遺物

421は土師器鍋。16世紀後半のものである。

③ 土坑SK26出土遺物

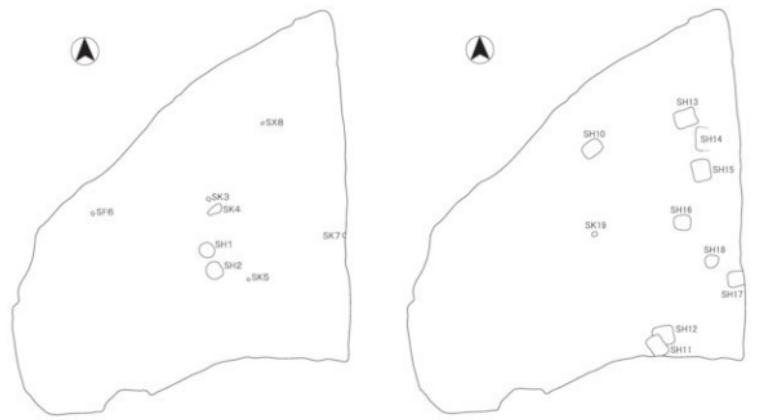
土師器鍋(422・423)、常滑製品の甕(424・427)・片口鉢(425・426)がある。土師器鍋は16世紀中葉、常滑製品の甕は15世紀後半のものである。

④ 墓SX53出土遺物

5枚の土師器皿(428～432)と山茶椀(433)が出土した。433は第5型式³のものである。

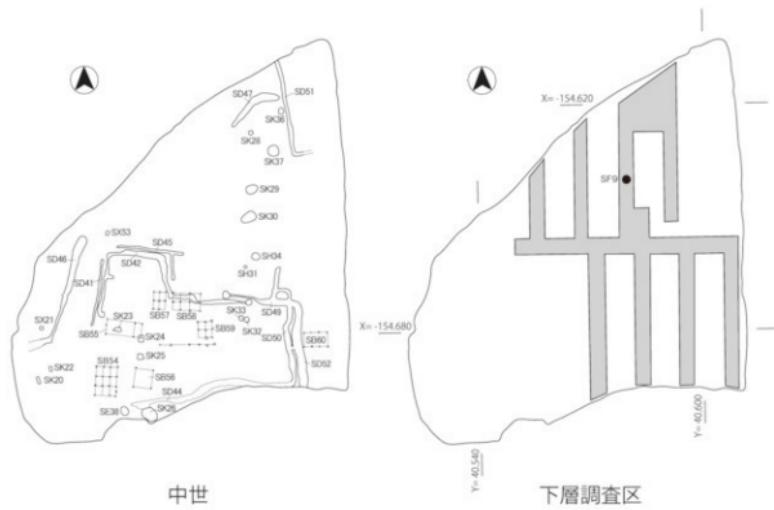
⑤ 溝出土遺物

溝からは、鞆羽口(434)、土師器皿(435)、青



縄文時代

飛鳥・奈良時代



中世

下層調査区

第36図 東野B遺跡遺構変遷図・下層調査区

磁楕（436）がある。鉄滓も多く出土している。

⑥包含層出土遺物

437は山茶楕。第5型式のものである。底部外面に墨書がある。438は土師器皿、439は陶器小皿（山皿）、440は瀬戸美濃製品の縁軸小皿である。441・442は南伊勢系の土師器羽釜。443は青磁楕。444は瀬戸美濃製品の平楕、445・446は常滑製品の甕、447は土鍤である。448・449は銅鏡である。

4 小結

最後に、まとめとして東野B遺跡での時期別の集落の変遷を述べる。

（1）縄文時代

東野B遺跡で縄文時代の遺構が確認できるのは中期末から後期初頭である。これ以前には、早期の良好な土器が出土しているが、ほとんどが遺物包含層からの出土遺物で、遺構に伴うものは少ない。早期になる可能性がある遺構は、土坑が1基のみ（S F 9）確認できるが、これも明確ではない。

中期末から後期初頭には、発掘調査区の中央付近に2棟の竪穴住居が造られる。周辺には石窯炉（S F 6）や埋甕（S X 8）なども散在する。

（2）飛鳥・奈良時代

発掘調査区の東半部で、8棟の竪穴住居が営まれる。土坑 S K 18は建物に伴う廃棄土坑か。これらの中の建物の多くには、精製の土師器が持ち込まれている。中村川・雲出川の飛鳥・奈良時代の集落の多くには、このような精製の土師器が搬入されるが、東野B遺跡も例外ではない。

（3）中世

前期になる遺構は少ない。明確に前期になるものは土坑墓1基（S X 53）のみである。中世後期には発掘調査区の南部で屋敷地が営まれる。建物は15世紀代が中心と思われる。掘立柱建物と区画溝、井戸を確認しているが、建物と区画溝には時期差がある。区画溝の多くからは鉄滓や羅羽口が出土しており、鉄の加工が行われていた可能性が高い。（竹田）

<註>

- ① 山茶楕については、藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994）による。

報告番号	地 区	遺構名	時期
S H 1	M 19	S B 1	縄文中期末～後期初頭
	N 19	S B 1	
	N 20	S B 1	
S H 2	N 21	S B 1	縄文中期末～後期初頭
S K 3	N 16	S K	縄文中期末
S K 4	N 17	土坑	縄文中期末～後期初頭
S K 5	P 21	S K 1	縄文
S F 6	F 17	炉跡	縄文
S K 7	V 17	S K 1	縄文
S X 8	Q 11	埋甕	縄文
S F 9	下層	土坑	縄文？
S H 10	M 13	S B 1	古代
	Q 26	S B	古代
S H 11	Q 26	S B 1	古代
	R 25	S B 1	古代
S H 12	S 25	S B 1	古代
	S 11	S B 1	古代
S H 14	T 12	S B 1	古代
	S 14	S B 1	古代
S H 15	T 14	S B 1	古代
	T 15	S B 1	古代
S H 16	S 18	S B 1	古代
	V 21	S B	古代
S H 17	V 21	S B 1	古代
S K 18	U 20	S K 1	古代
S K 19	M 18	S K 1	古代？
S K 20	B 26	S K 1	中世
S K 21	C 23	S K 1	中世
S K 22	C 25	S K 1	中世初期
S K 23	H 23	S K 2	中世後期
S K 24	I 23	S K 1	中世
S K 25	I 24	S K 1	中世初期
S K 26	I 28	S K 1	中世後期
S K 27	L 15	S K 1	中世初期
S K 28	P 10	S K 1	中世
S K 29	P 13	S K 1	近世
S K 30	P 15	S K 1	近世
S K 31	P 19	S K 1	中世初期
S K 32	P 22	S K 1	中世後期
S K 33	P 22	S K 2	
S K 34	Q 18	S K 1	近世
S K 35	Q 25	S K 1	中世初期
S K 36	R 8	S K 1	中世初期
S K 37	R 11	S K 1	中世初期
S E 38	H 28	S E 1	中世後期
S E 39	O 20	S E 1	中世後期
	D 29	S D 1	中世後期？
S D 40	D 21	S D 1	不明
	E 19	S D 1	中世後期
S D 41	F 21	S D 1	中世後期？
	F 22	S D 2	中世
	K 26	S D 1	中世後期
S D 42	K 21	S D 1	中世後期
	M 21	S D 1	中世後期？
N 21	S D 1	中世	
S D 43	I 17	S D 1	中世後期？
	J 27	S D 1	近世
S D 44	M 27	S D 1	中世後期
	Q 26	S D 1	中世
	R 26	S D 1	中世後期
S D 45	K 18	S D 1	中世初期？
S D 46	K 19	S D 1	中世初期？
S D 47	Q 8	S K 1	中世初期
S D 48	R 19	S D 1	中世初期
S D 49	R 21	S D 1	中世後期
	S 23	S D 1	中世
S D 50	S 26	S D 1	不明
S D 51	T 12	S D 1	中世後期
S D 52	T 23	S D 2	不明
S X 53	G 16	S K 1	中世
S B 54	F-G 25-27	中世	
S B 55	G-I 22-23	中世	
S B 56	H-J 25-27	中世	
S B 57	J-K 20-21	中世	
S B 58	K-M 20-21	中世	
S B 59	M-N 22-23	中世	
S B 60	T-U 23-24	中世	

第3表 東野B遺跡遺構一覧表

VI 屋敷田遺跡

1 調査の経過と調査区の立地

屋敷田遺跡は松阪市嬉野森本町に所在する遺跡である。昭和61年度県営圃場整備事業（中郷）地区に伴って発掘調査が実施された。調査は昭和61年12月5日から開始し、12月26日に終了した。調査面積は400m²である。遺跡は中村川右岸の標高45m程の中位段丘の先端に位置する。遺跡の眼前には午前坊遺跡、北垣外遺跡が広がる。

2 検出した遺構

発掘調査の結果、確認された遺構は15世紀から16世紀のものである。

掘立柱建物SB1 調査区の中央で検出した重複関係からSK6より古い東西棟の建物である。東西方向の柱間は西から2.8m+2.8m+2.8m+2.4m、南北方向の柱間は北から2.2m+3.0mである。棟方向はE 17°Sである。

掘立柱建物SB2 SB1の南側で検出した。柱間は不揃いで東西方向は北で2.9m、南で2.8m。南北方向は西で3.3m、東で3.4mである。土坑SK10に伴う可能性がある。棟方向はE 15°Sである。

壠SA3・4 SB1の北側に位置しており建物に伴うものと思われる。SA3の柱間は1.4m前後で5間を確認している。SA4の柱間は2.7m前後で2間を確認しているが、さらに1間東に続く可能性があるが柱間が3.2mと広くなる。

土坑SK6 4m前後の隅丸方形の土坑の東側に東西1.6m、南北2.8mの張り出し部がある。2基の土坑が重複している可能性があるがどちらも灰茶褐色の埋土で区別はつかず同一の土坑として扱った。方形部の北側には東西2.8m、南北2mの範囲で床面に20~30cmの川原石が1段~2段集積されている。何に使われたのかその性格は不明である。SK6からは土師器皿(1~2)・鍋(3~5)、山茶椀(6~7)が出土しており15世紀前半に埋没したと考えられる。南半中央には現況でコ字形配置の石列が見られる。内側に面を描えており、その間隔は東西方向で約2mである。SK6埋没後に築かれたものである。SK6と重なる土坑SK8は古

く、土坑SK7は新しいことが埋土の重複関係から確認されている。SK7の埋土には焼土粒、鉄滓を含んでいる。

土坑SK5 SK6の北に位置する東西約1.6m、南北約1m、深さ約20cmの長方形土坑である。埋土は灰茶褐色土に炭化物と焼土の細粒が混入している。土師器皿・鍋の細片が少量出土している。

土坑SK11 SK6の南に位置する東西約1.1m、南北約0.5m、深さ約30cmの楕円形土坑である。灰茶褐色土の埋土から土師器鍋(10)が出土している。15世紀前半に埋没したと考えられる。

土坑SK9 SB1の東に位置する東西約1.2m、南北約1.5m、深さ約30cmの楕円形土坑である。灰茶褐色土の埋土から土師器鍋(8)が出土している。16世紀に入つてから埋没した遺構と考えられる。

土坑SK10 調査区の南東部分で検出した。東西約2.6m、南北約2.8mの隅丸方形の土坑である。深さは約20cmである。灰茶褐色土の埋土からは土師器鍋(9)が出土している。16世紀に入つてから埋没した遺構と考えられる。

3 出土した遺物

土坑SK6出土土器(1~7)(1~2)は南伊勢系土師器皿B系統^①、(3~5)は南伊勢系鍋で伊藤編年第3段階b形式^②に相当する。山茶椀(6~7)のうち7の底部外面には墨書きがみられる。いずれも15世紀前半頃のものと考えられる。

土坑SK9~11出土土器(8~10) いずれも南伊勢系鍋の口縁部であるが、SK9出土(8)、SK10出土(9)は南伊勢系鍋第4段階に相当、SK11出土(10)は第3段階b形式に相当する。

その他の出土遺物には、青磁碗、天目茶碗・擂鉢の破片などがある。

4 調査のまとめ

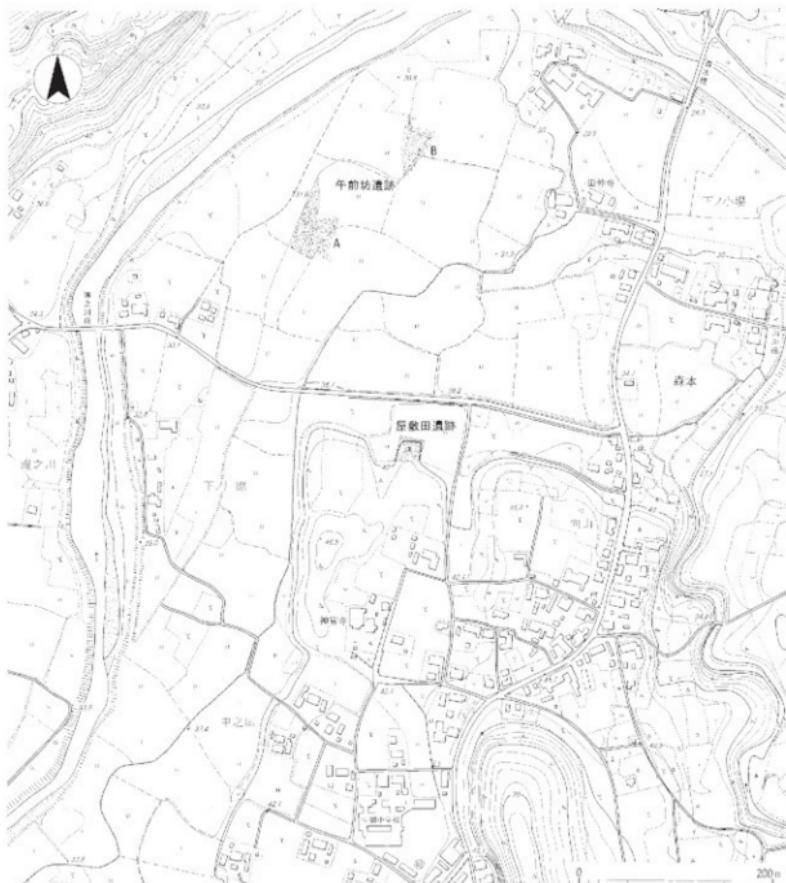
今回の調査で確認された遺構・遺物は15世紀から16世紀にかけてのものである。調査は屋敷田遺跡として行っているが、調査地は森本城の範囲に含まれており^③、今回確認された遺構が森本城に伴うものであるとすれば、城の存続時期の確定をするこ

とはできないまでもその一端を示すことができたの
ではなかろうか。

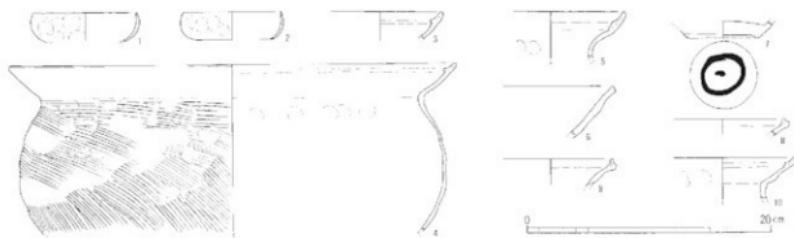
(上村安生)

＜註＞

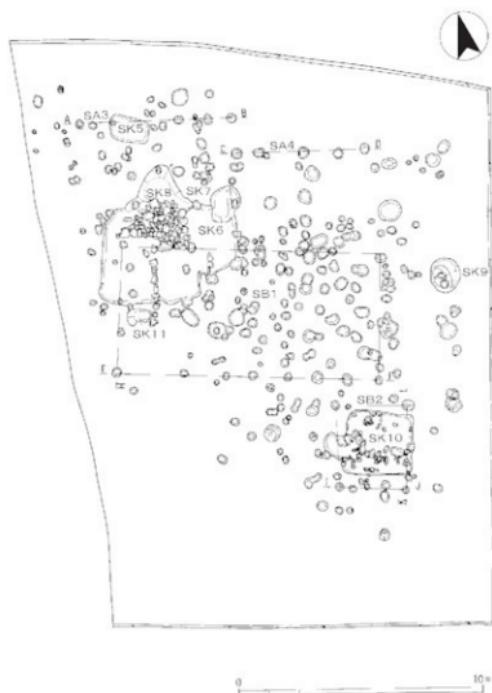
- ① 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告——志郡美杉村
上多気所在』三重県埋蔵文化財センター 1993
- ② 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」
『Mie history』vol.1 三重歴史文化研究会 1990
以下この編年により記述する。
- ③ 伊藤裕偉「北畠氏領域における阿坂城とその周辺論」
『Mie history』vol.6 三重歴史文化研究会 1993
伊藤氏はこの論考の中で郭相当部分で南北約 280m、
東西約 180 m の長方形を呈した範囲を想定されてい
る。



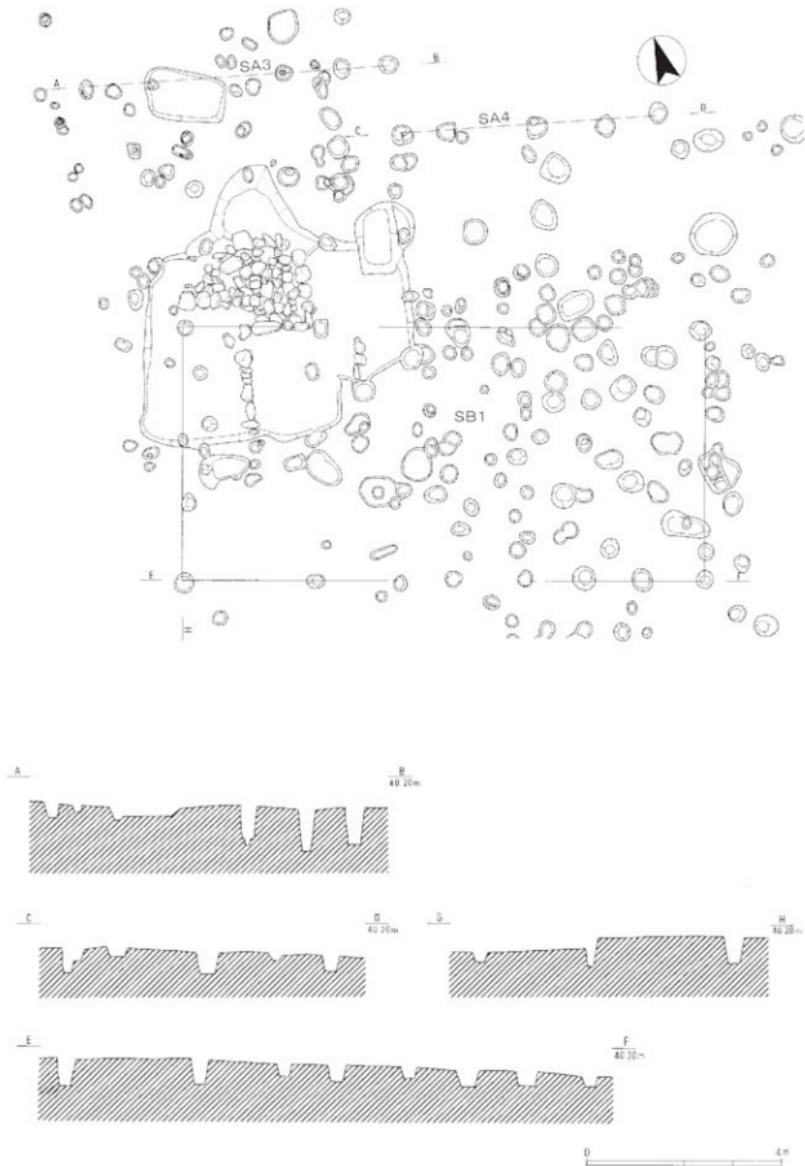
第37図 屋敷田遺跡調査区位置図及び周辺地形図（1：5,000）



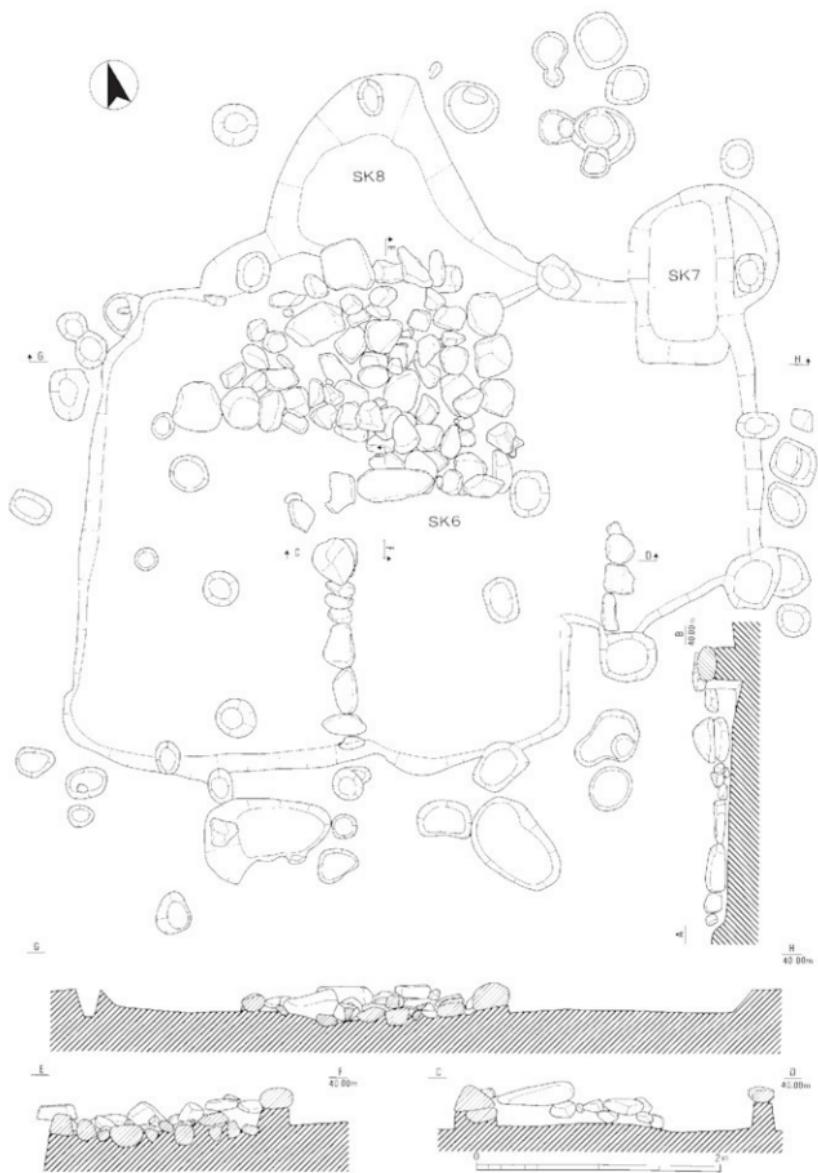
第38図 屋敷田遺跡出土遺物（1：4）



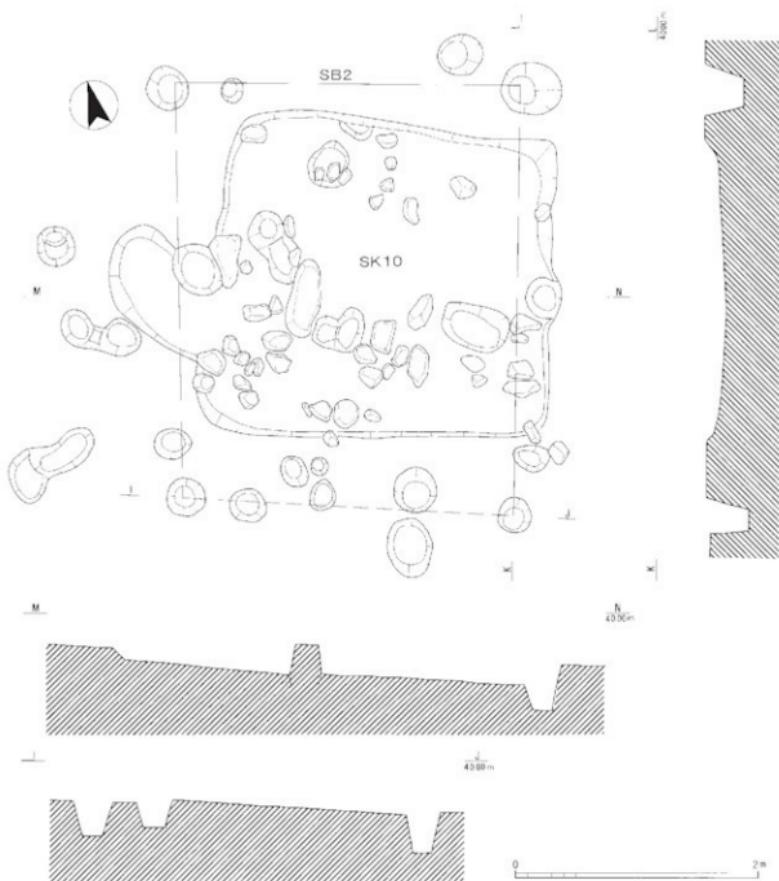
第39図 屋敷田遺跡遺構平面図（1：200）



第40図 屋敷田遺跡掘立柱建物SB1、塚SA3・4 (1:100)



第41図 屋敷田遺跡土坑SK 6~8 (1:40)



第42図 屋敷田遺跡掘立柱建物SB 2、土坑SK 10 (1:40)

報告番号	実測番号	器種	出土地区	出土遺構	法量	調整・技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001-02	土師器	皿	C11	SK6	□ 8.4 内: 扇1、扇1	やや粗	良	灰白 10YR8/2	1/5	
2	001-10	土師器	皿	C11	SK6	□ 8.0 内: 扇1、扇1	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/4	1/5	
3	001-03	土師器	鍋	C11	SK6	— 口: 32扇	やや密	良	に赤い黄橙 10YR6/4	小片	
4	002-01	土師器	鍋	C11	SK6	□ 36.6 内: 扇1、枕1 外: 扇1、枕1	密	良	浅黄 2.5Y7/3	2/5	
5	001-06	土師器	鍋	C11	SK6	— 口内: 32扇 外: 扇1、枕1	やや粗	良	灰白 2.5Y8/2	小片	
6	001-09	陶器	山茶碗	C11	SK6	— 0.0扇	密	良	浅黄橙 10YR8/4	1/5	
7	001-11	陶器	山茶碗	C11	SK6	面 5.4 0.0扇	密	良	灰白-7 5Y6/2	底部充存	
8	001-05	土師器	鍋	E11	SK9	— 32扇	密	良	に赤い黄橙 10Y7/3	小片	
9	001-07	土師器	鍋	E13	SK10	— 32扇	密	良	に赤い黄橙 10Y7/3	小片	
10	001-08	土師器	鍋	B12	SK11	— □: 32扇 内外: 扇1、枕1	やや密	良	に赤い黄橙 10Y7/2	小片	

第4表 屋敷田遺跡遺物観察表

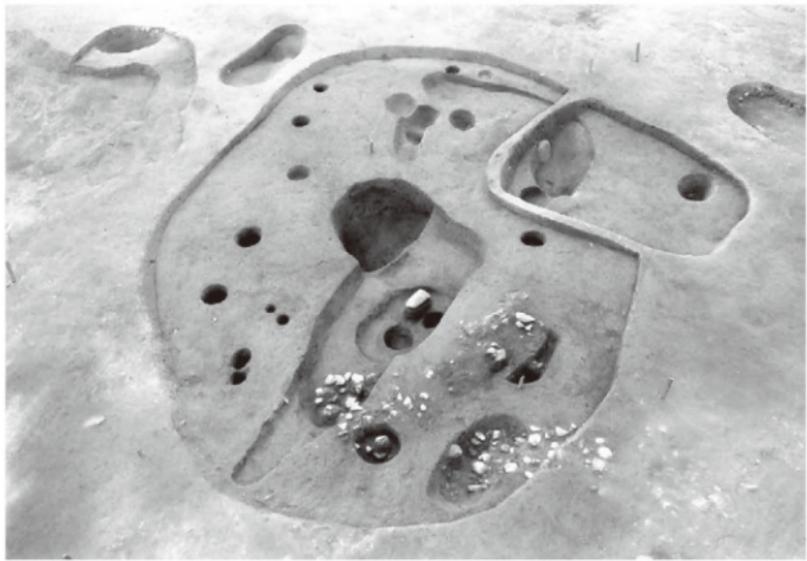


釜生田遺跡遠景（南から）

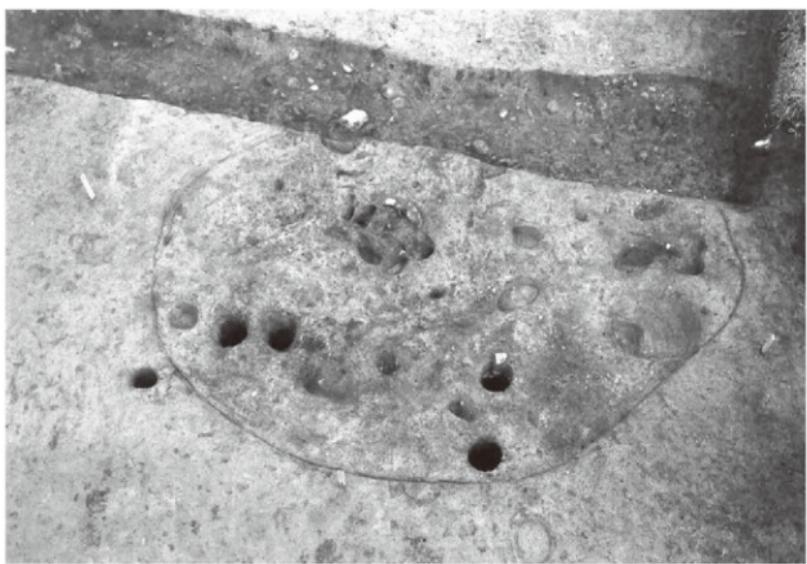


釜生田遺跡遠景（西から）

図版2



釜生田遺跡竪穴住居SH3（東から）



釜生田遺跡竪穴住居SH1（北から）

図版 3



釜生田遺跡掘立柱建物 S.B. 5周辺（北から）



東野B遺跡遠景（南から）

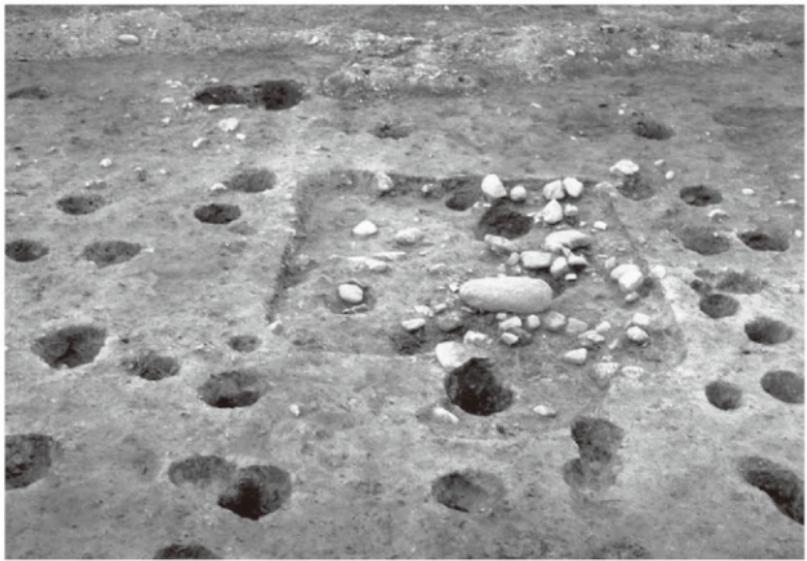
図版4



東野B遺跡竪穴住居SH1・2（東から）



東野B遺跡竪穴住居SH11・12（南から）



屋敷田遺跡掘立柱建物 S B 2・土坑 S K 10（東から）



屋敷田遺跡土坑 S K 6~8・12（南から）

報告書抄録

松阪市中村川流域の考古資料 1

研究紀要第 16 — 2 号

2007（平成 19）年 3 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 有限会社 山 文 印 刷